
アオイハル～普通じゃない俺のとんでもない青春の物語

石鍋 壺回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アオイハル〜普通じゃない俺のとんでもない青春の物語

【Nコード】

N5925B

【作者名】

石鍋 盞回し

【あらすじ】

主人公である青崎伸あおさきしんは学年のアイドルに告白した！んですけどにフレタ。それをキツカケに彼は幼馴染やら親友やらに巻き込まれて騒動のど真ん中で右往左往することに……『幽霊は同居人？』と同じ世界。一年後の新人生である青崎伸もまた、普通ではない秘密を持っていた！ドタバタ？ラブコメ？特殊能力？なお話。

ブローグ

ここは埼玉県にある小日向高校。

生徒数九百三十七人、どこにでもある普通科の学校である。

裏門の南側から順に、校庭、体育館および図書館、食堂、特別教室などがある三階建ての特別棟、教室や職員室がある四階建ての一般棟、そして正門がある。

それぞれが渡り廊下でつながっていて屋上に出るためには鍵が閉まった一般棟四階の扉から出るしかない。

校門は校庭の西側に小さいものが、生徒用、教師用の玄関の真正面に電動の大掛かりなものがあり、校舎の外観は限りなく白に近いクリーム色。

一般棟の東側西側に入り口と階段が、校舎の両端の外側にはそれぞれ屋上までつながった鉄製の非常階段があり、東側に駐車場つきで職員室の正面、教師専用の玄関、西側に生徒用の玄関がそれぞれの階にあり、一階から順に一年二年三年の教室がある。

四階には第一、第二多目的室、視聴覚室、生徒会室、倉庫、開かずの間となっている。

入学当初は開かずの間ってなんだろうと思ったけれど校長のジョークだろうと無理に納得した。

昼休みの今、俺こと一年生、蒼咲あおさき 伸しんが立っているのはどこの高校

でも一本はあるであろう、少し大きめの桜の木でしたので、《ここで告白をすると恋が実る》という伝説があったりなかったりする場所だ。

サクラが散って今は青々とした葉が、梅雨に入る前にためておこうとしているように太陽光をこれでもかと浴びてさわさわと揺れている。

そして、正面に居るのは階違いのクラス、一年九組の大澤義美という女の子。

「あ、あのう……。その……」

大澤さんは言いよどみながら、もじもじとしながら顔を赤く染めていた。

もつとも、伝説があったりなかったりするこんな場所に女の子を呼び出したのだ。

こっちが何をしたいのかなどすでに相手には分かりきったことで、この反応はある意味当たり前である。

そう、俺は彼女に惚れている。

そのきっかけは廊下ですれ違ったときに電気が走ったからだ。

俗に言う一目ぼれ。

クラスの階違いで今までまったく面識がなかったから名前を知るのからここに出てきてもらうまで散々苦労したのを思い出す。

一体何人に焼きそばパンをたかられたことが……。

苦い過去を飲み下して正面の女の子を見つめた。

いまどき珍しい変則ツインテールで、肩甲骨辺りまで伸びた、日本古来より営々と築かれてきた‘黒髪の美意識’の手本のようなつややかな髪の一部を途中で左右に縛り分けている。

くりくりとしたつぶらな瞳は宝石のようで、春の日差しのような温かい笑顔は俺じゃなくなつてすれ違いざまに振り向くことは必至だ。

綺麗、というよりもまだ、可憐と表したほうが適切な、身にまとう柔らかな空気にはとても癒される彼女。

手のひらに汗を握って、彼女に気付かれないようなかな深呼吸をして。

「はじめまして大澤さん。俺は一階の一年四組の蒼咲伸。あのさ、……急な話なんだけど……一目見たときから好きになりました！俺と付き合ってください！」

「嫌です！」

「え……？」

チヨット待ってくれ、今のやり取りまで、俺の言葉の後のタイムラグがコンマ一秒もなかったような……。

「え……？じゃないです。イヤです。大体なんであなたは私の名前知っているのですか！ストーカーというやつですか？超気持ち悪い

です！」

「そういうわけじゃ…」

「じゃあどういうわけですか。さしずめ知り合いに焼きそばパンでも握らせて私のことこそそこそ調べたのではないですか！？それをストーカーって言うのです。」

グサリ。

図星です。キツツ…と、いいですか、あんなにつぶらな瞳で小動物みたいにかわいい女の子に、マサカここまで徹底的になじられるとは思っていなかったわけで…。

目の前で、いまだ丁寧語でぎゃあぎゃあ言っている彼女にがつくりと肩を落としただけで、俺はもう声も出ない。

「あら？変態はどこにいったのでしょうか。一瞬目を放した隙に居なくなっちゃいました…」

そうこうしていたら、俺は正面にいるつてのにきよろきよろあたりを見渡してオオサワサンは不愉快そうにずかずかと教室のほうへ帰っていつてしまった。

そうかよ。

見えなくなるほど俺はへこんでんのか。

そりゃあ、失恋した上にストーカーやら変態呼ばわりされりゃあだれだってへこむさ。

ウチの家系は大昔、国家に仇成す敵を暗殺する特殊能力者の多い血筋だったらしい。

ありがたーいその能力の片鱗を受け継いだ俺は極度にテンションが下がる、つまり、ブルーになると目視されていても認識されなくなるほど著しく存在感が希薄になる、《インビジ・ブルー》というなんともふざけた名前の能力を生まれつき持っているのだ。

さしずめ、彼女はいつの間にか俺が帰っちまったと思ったんだろう。

「はあ、このまま教室に戻ってもどうせ出席に数えられないし、午後はふけちまうか。」

この数十秒で一体何度目になるのかわからないため息について、俺は教室のかばんを取りに踏み出した。

伝説が嘘だと確信し、もう二度とこの木下には足を踏み入れないと心に誓ってから。

第一話『天敵な幼馴染?』

ふらふらと階段を上り、力なく教室のドアを開いた。

今の俺は限りなく人に見えにくい状態になっているのだ。

クラスメイトたちには古い校舎の立て付けの悪さで勝手にドアが開いたように見えているに違いない。

あゝ、学校ふけて、まずバツティングセンターにでも行って、それから少しテンション上がってきたらゲーセンでも行って、他人に見えるくらいになったら誰か呼んでカラオケにでもしけこんで解散つてそこか。

「……………だ!」

机に入っている教科書を無理やり学生かばんに押し込んで、肩に突っかけた。

ああ、一応早退届を出したほうがいいか……めんどつくせえ、良いか別に。

けだるい体に鞭打って、再び教室の後ろのドアから出て行こうとしたとき、パツパツンなんていう音と同時に垂直に学生かばんが旋毛の上に立った。

「伸!何堂々と授業ふけようとしてんだ!」

ああ、こいつに見つかっちゃったか。

「何だよ明巳、俺はとても心が傷ついたからこれから癒しの旅に出なきゃならないんだ。放っておいてくれ。」

くるりと向き直るとやや目が釣りあがっているやや栗色のボブカットの女の子が一人。

彼女は明巳こと、クラスメイトのかみらぎ あけみ 鍋木明巳である。

ウチの実家とは隣同士で、もとより親同士の交流もあつて昔から何やかやと世話焼きをしてくる男勝りな幼馴染である。

そして昔っからの付き合いでインビジ・ブルーに耐性があり、へこんだときの俺の天敵だ。

どこか、俺を見てあきれに似た表情を浮かべている明巳は、その凛としたの風貌、そして鼻筋が通った整った器量よしでこの学年の美人ランキングの十位以内に入っているとか、いないとか。

俺に言わせれば巷の男よりよっぽど豪胆な男らしい性格で、とてもそんなランキングに入るようなやつとは思えないが。

「ヴァアアアカ！伸みたいな半端者を義美が相手するわけないじゃん！それを何が、傷心を癒す旅にでる、よ！なっさけないわねえ。」

再びパツカッなんて音と共に一撃決めてきた。

「……おい明巳、お前、その話どれくらいまで知ってたんだよ。それに、義美っておまえ大澤さんと知り合いなのかよ。」

「あつたりまえよ。何を隠そう、伸が隠したいと思っっていることすべてを知っているって寸法よ！なんてったって義美は私の親友なんだから。いつも屋上で一緒にご飯を食べるのに、今日は早々に引き上げていくから何かと思っただけ聞いてみれば、まあ伸のうれしはずかし失恋パーティーというわけよ！」

目の端に涙を浮かべてケラケラと大爆笑しながら、バシバシと明巳のやつ、目いっぱい力で俺を叩き通した。

しかも攻撃は次第に握り拳へと進化していく。

「いてーからやめろ！大体なあ、何でお前に半端もの呼ばわりされにやなんのだ！」

「へ？伸、義美がどんな子か知らないで告白したのか？」

「そんなん、これからゆつくりと知っていきたかったんだよ。大体一目ぼれだったしな。」

振られたときを思い出してしまつて、また小さなため息が出た。

そして下向いた視線を明巳に戻すと、明巳のヤツは大きく大きく振りかぶっていた。

「バアツツカモーン！」

明巳のスクリーノ回転を加えられた渾身のテレホンパンチが眉間に直撃。

伸は泡を食って卒倒した。

ちなみに明巳は空手初段。

「起きろ！」

ベカ、なんて音をさせて明巳は恵助を蹴り起こす。

「あいててて…お前、眉間って強打すると死んじゃうんだぜ？」

「一回死ななきゃ馬鹿は直んないの！敵を知り己を知れば百戦危うからず。ウチのお爺の名言よ！義美のことをぜんぜん知らないくせにアタックなんかかけるからそんな結果に終わったのよ！」

「まあ、その言葉は孫子の名言だけだな。」

「ええう？嘘…………まじで？」

「ガチで。」

「女の子に…………」

「え？」

「恥をかかすなー！」

ボカリ。

再び豪快な音をさせて、顔を真っ赤にした明巳のこぶしが眉間にクリティカルヒット。

ちなみに明巳は空手インターハイで優勝経験あり。

こんなときだけ『女の子』を引つ張り出すなんてずるい、なんて口に出したら殺されてしまうから必死に痛みと一緒に飲み込んだ。

超イテー。

絶対今、眉間から白い煙が出てる。

「えほん、だから、私が、義美とうまく行くようにあんたを鍛えてあげるわ！」

「いや、無理だろ。俺、ストーカーとか変態とか言われちまってるし心証はこれ以上ないほど悪いぜ？」

「うん。まあ、最悪ダメでも、至少くらい心証を回復させてあげたいからね。いくらだめな幼馴染でも。」

「…明巳。」

腕組みをして、これからどうするか不敵な笑みを浮かべながら夢想する彼女。

肩の周りに黒い蜃気楼のようなオーラが見え隠れするのは見なかったことにして。

明巳はいつも、やり方としては暴力ばかり振るうけれど、何も無い空間に一人話しかけるといふ恥を押し切ってこんなに俺を励ましてくれている。

つまり、こいつはこういう奴なのだ。

その、ともすれば粗野とも取れる動きはこいつの照れ隠しであることはだいぶ前から知っている。

「…ありがとうな、明巳。」

「ま、まあ、腐れ縁ってヤツかしら。ほら先生来たから早く戻らなきゃ。」

つーんと明巳は顔を背けた。さらりと、髪が風になびく。

そのとき、一瞬校内放送のスピーカーからぶつりと音がしてから授業の開始のチャイムが鳴り響く。

教卓側のドアの前で待ち構えていたのではないかという絶妙なタイミングで教師が入ってきた。

「でもまあ、何にしても、今日はふける。居ても出席取られないだろうからな。」

「あっそ。しーらないっ!」

フフフと笑って踊るように明巳はすぐさま自分の席に着いた。

傍目には一人芝居の奇行を演じたことなど気にも留めずに、あっけらかんとクラスの連中にわけのわからない午後の挨拶をしまくってから。

「何だってんだよあいつ。」

きしみに似たような音を響かせて教室のドアを再び開けて出て行くとしたとき。

「おい、蒼咲、蒼咲伸。おまえ、そんなに堂々とふけるほど俺の授業が嫌いなのか？」

「そーそー、大ッ嫌いなんすよー数学なんて犬もくわ……え？」

きつと無脊椎反射だったに違いない。

まるで瞬きをするくらい自然に、無意識に、あっという間にその問いに本音で答えてしまったことに気づき、そしてその迂闊さに背に一筋の震が伝った。

見ちゃダメだと本能は首を正面に戻そうと抵抗してくる。

しかし、そのまま出て行くわけにも行かない。

本能に抗って首を正面の黒板に向けると、青筋を立てて小刻みに震えている数学教師兼空手部顧問、田村久雄が歪な笑みを浮かべていた。

「え………？俺のこと、見えてるンすか？」

「ああ、お前の顔に浮かぶ脂汗の数まではつきりとな。えー、蒼咲伸、次回のテスト点数から十五点引き。ついでに、後で職員室のほうへ来い。数学が大ッ好きになるようなすばらしい時間を用意してやろう。」

「そ、そんな…ばかな」

開いた口を塞ぐ前に視線を明巳へと流した。

口だけ、バーカ、だから言ったんだ。
と動かしてくすくすと笑っている。

ああ、見直した俺が馬鹿だった。

やっぱり明巳は悪魔だった。分かっているのに教えてくれなかったんだから。

インビジ・ブルーは別の感情が勝つと発動が終わる。

そしてそれはあまりに自然に起こるため本人には認識できないのだ。

諦めて、おとなしく席に着いた。

今日は俺ばかりやたら指名されたのは言うまでもない。

うがぁぁっ！何でこんなときだけインビジ・ブルー発動してくれないんだチクシヨ〜！

第二話『逆転満塁の秘策』

午後六時。

やっと、数学洗脳カリキュラムが終わった。

まったく意識していないのに、口からはさまざまな公式がぶつぶつと垂れ流されている。

ふらふらとおぼつかない足に鞭打って光り輝く自由への扉を開いたとき、真っ先に目に飛び込んできたのは悪戯っぽく微笑む悪魔、明巳だった。

「おおっ？予想通り十歳は老けこんだな！」

「……うるせー。おかげでこっちは死にそうだ。」

「おかげで、って授業ふけようとした仲が全面的に悪い。まあ、特別に待っててやったんだから感謝しなさい。」

並んで薄暗くなった校舎の中を進みだす。

「そんなん頼んでねえよ。」

「別に頼まれてないもの。」

ほれ、と明巳は缶コーヒーを投げつけてきた。

「お、サンキュ……う？」

受け取ってプルタブを起こすと同時に、ズイ、と目の前に明巳の手のひらが突き出される。

「二百四十円。」

「はあ？おごりじゃねーのかよ。大体なんで二本分……」

明巳は悪戯っぽく笑いながら空になったミルクティーの缶を揺らして見せる。

「俺が金欠病なのは知ってるだろ？」

「焼きそばパンを随分たかられたみたいだからね。まあ、空になったコーヒーを手渡して二百四十円請求にしなかっただけありがたいと思いなさい。」

ああ、明巳のヤツ胸張ってやがる。

なんていう横暴。

でも支払う俺はきつと社会の最下層の弱者なんだろうとかおもったり。

いや、この心の広さは神だね。とか負け惜しみ。

「それで？俺を鍛えるって何をするつもりなんだよ。」

「うん、正確には鍛えるっていうか、これ以上ない逆転満塁ホームランを一発決められれば汚名返上でできていいだろうとね。」

「なんだよそれ。」

「まあ、簡単に言うと、義美は今、悪質な本物のストーカーみたいなのに付きまとわれてるらしくて、それをとっ捕まえましょうって話。」

「あゝ、だから俺のこといきなりストーカー呼ばわりしてきたのか。」

「いや、単に伸がキモかったからじゃん？まあ、それも在るだろうケド。」

「やかましい。どうせ俺は一般平均値前後の男だ。大澤さんは高嶺の花で、キモがられることだってありますよーだ。」

「もう、真に受けてそんなに卑屈になるなよう。冗談なんだからさ。」

豪快な音を響かせて明巳は何度もひっぱたいてくる。

まったく、昔から俺を壊れかけのテレビか何かと勘違いしているのか、ずっとこればかりだ。

帰路、信号が青になり横断歩道を進み出すと同時にそれを受け止めて明巳に向き直った。

「イテーからやめろって。で、俺はどうすればいいんだよ」

「お、話が早くていいね。やることは簡単。伸、あんた明日から義

美のストーカーになりなさい。」

「へ？」

何をおっしゃる明巳さん。

いや、きっと聞き間違いだ。

すでにアレだけ言われたっていうのに、そして何で俺がやっても居ないそんな犯罪者を演じる必要があるのか。

「だからさー。」

そうそう、聞きまちが

「伸がその悪質なストーカーとして名乗り出るんだよ」

いじゃないいい！！！？

「バ、バツカ野郎！そんなことしたらきつと大澤義美ファンクラブの連中にはブチ殺されてさらし首、そして世間的に犯罪者予備軍。学校にも居られなくなっちまうだろうが！」

「それだけじゃないわよ。義美は世界的大手企業、あの大澤コンツェルンの一人娘だから、暗殺されちゃったりするかも。」

「は？尚ダメだろ馬鹿ー！」

「まあ落ち着いて聞きたまい。哀れで浅慮な子羊よ。」

「お、落ち着いて聞いてなんぞ居られるかー！暗殺とか聞かされてるんだぜこっちは！」

ボカリ。

こっちの悲痛な叫びを打ち破って明巳の拳が頬にめり込んできた。

「ウウ…暴力反対。」

「だから話を聞きなさいよ！」

「……………はい。」

「素直でよろしい。何でストーカーするのか。それはきつと、振られた男が、自分の愛が相手に伝わらなかつたから振られたんだとカシガイして歪むからよ！そうおじいちゃんが言ってた！」

「いや、何でそんなにおじいちゃん子なんだよお前。」

「いいでしょ別に！それで、まあそのストーカーは何度も靴箱にいろいろなものを詰め込んでみたり、体育後に机からものが紛失したり、油断していたらその使用後の体操着がなくなったりとまあ、『愛を伝えるために』変態丸出し暴走機関車な訳。」

「……………はい。」

「……………（ここまで素直だと少し張り合いが無いな）。それでその活動を伸が横取りしたら、きつとそいつは怒って、今度は今までのストーカーは自分だって義美本人に分かるように表に出てくるでしよう？きつと、実力行使で。それを伸が捕まえるのよ。そして、自分はこのストーカーをあぶりだすためにわざとスケープゴートに甘ん

じたんだってみんなの前で、義美の前で公言する。」

「……なるほど……！」

「普通の人には、そんなこと出来ないでしょ？じゃあ、それこそがこれ以上ない絶好のアピールになっているってことじゃないかい？」

「明巳すげー！愛してるー！でも、もし、その本物のストーカーが出てこないで、諦めちまったらどうするんだ？」

ちっ…。

「そのときはまあ、まあ、何とか。私は変わらずの付き合いをしてやるし、まあさっき言った暗殺云々はたぶん無いし、平気だろ。」

「お、オイ今舌打ちしたろ。してたよな？おのれ、哀れで無知な子羊風情がこの作戦の最大の弱点に気付きおったな、って感じですよ！」

「うつさいな。したよ。しました。したとさ。でもそれがどうした。心証がこれ以上悪くなるのが怖いから、ほれた子が嫌な思いをしてるのを知っても放っておく訳だ。伸はそういう奴だった訳ですか。」

上目遣いで明巳はねめつける様に睨み付けてきた。

「それは、」

確かに、いや、好きになったあの、付き合いたいあの、そういう打算を抜きにしても。

きつと、大澤さんはすごく嫌な気持ちで日々をすごしているんだろ
うと、それこそ俺だったら毎日インビジ・ブルーが発動するような
日々を過ごしているんだろと、ふと、そう思った。

分かる。

それはきつと、あのときのような…。

それなら。

「——いや、言ってみただけだよ。わかった。明日、でいいのか？
それを試してみる。」

「よし、よく言った。伸はそういう奴だと思ってた。」

悪戯っぽく微笑んで、明巳は俺の前でくるりと一回転して見せた。

日が沈みかけて、薄ぼんやり街頭に照らされているそんな明巳は、
不覚にも、少し可愛かった。

気取られないように少しうつむいて。

「よく言っぜ。まったく。」

「ン、本心だよこれは。それに。」

「それになんだ？」

顔を上げると、明巳の向こう、すぐそこに、俺の家と明巳の家の明

かりが見えた。

「あ、もう家が見えちゃったな。ふんふん、この香りは伸の家がロ
ールキャベツ、私の家が…やった！ビーフストロガノフ！」

「ん？何のにおいもしねーぞ？」

「それは、伸が鈍感なんだって。じゃあ、また明日な」

「あ、おい！門前まで送るって！」

駆け出す明巳の背中に言うと、そのまま首だけ明巳は振り返って。

「バーカ、たった十数メートルで何か起こるわけ…イターツ！」

そんな状態なものだから、ふらふらと蛇行して電柱に明巳は突っ込
んでいた。

「だからいったんだ。後、そんなに盛大に転んだから、パンツ丸見
えだぞ」

「ええう？嘘…」

「嘘。」

あわててスカートを直そうとしていた真つ赤な明巳の顔が瞬時に影
で黒くなる。

「ああ、なんだ。騒がしいと思ったら伸か。おかえり。そろそろ近
所迷惑だから…」

玄関を開けて、メガネをかけた三白眼の線の細い男、蒼咲誠あおさき まことこと親父が出てきた。

夜の闇と正面きつて喧嘩しそうなほど色白の誠はぼんやり立っていたら幽霊のように見えるという不思議なたたずまい。

「あ、親父ただいま。」

「——くしいんんんん！！てかむしろ死ねえ！」

「え？ぎゃあああああああ」

何かの影が一瞬だけ見えた。

それが眉間にヒットして、赤い液体を撒きながら俺が倒れているときに、撥ねたそれが、明巳が投げた道端の石だとわかった。

「ああ、明巳君か。こんばんは。いつも伸が迷惑かけてない？すぐ透明になる馬鹿なヤツだけどヨロシクやってくれよ。」

——オイ、この惨状を何さりと受け止め流してんだよ馬鹿親父
だらだらと眉間から血を流す俺を家に引きずり込みながら、柔らかな笑みで親父は明巳に挨拶をしていやがる。

「今晚は叔父さん。迷惑なんて。それに透明になるのももう慣れっこですよ。」

——さて、死にそんな俺は放置か？なに猫をかぶっているんだ明巳のヤツ

「ありがとう、気をつけて帰ってくれよ。隣まで十数メートルといえど何が起こるかわからない世の中だからね。伸がもう少しマシなら送って行かせただけだよ。」

「心配性ですな叔父さんは。大丈夫ですよ。ご存知、腕には自信ありますから。」

力こぶを作る真似事をして一人頷く明巳をみて誠は一度ゆっくりと頷いて。

「頼もしいね。もう少し伸にも見習って欲しいくらいだ。でも、もし荒事があつたら伸に押し付けちゃって良いからね。仮にも男だから。」

「んー、期待しないでその時を待ってます。」

ひとしきり二人で会話に花を咲かせている間に、垂れてきた血は左目に入って視界が半分朱に染まっている。

——何が『仮にも』男だ！てか、体動いてくれないんだからいい加減介抱してくれー！！死ぬぞこれ！

伸の魂の嘆きは誰にも届くことなく虚空に消えた。そしてインビジ・ブルー発動。

しっかりと親父は明巳が玄関に入るのを確認してから、ひょいと俺を担ぎ上げて家の中へ。

「さて伸。何も消えることないじゃないか。ほら、今日はビーフス

トロガノフだからテンションを上げなさい。」

平然と俺を食卓につかせ、親父は目の前に夕飯を並べ立てる。

あまりのことに、いっぺんに体の麻痺がすっ飛んだ。

勢いよく自分の額を指差して、

「この血をみるバカ親父！こんなに血を流してるのにビーフストロガノフなんかで…」

「僕が精魂込めて作ったビーフストロガノフを、『なんか』呼ばわりとはね。伸。」

——あ、やべえ。勢いあまって特大地雷踏んじやった。

勢いよく椅子から立ち上がると親父は居間を越え寝室を通り、まさに電光石火、お袋の仏壇の前に力なく倒れこむ。

「ああ、深雪^{みゆき}、ああ深雪。ついに伸がぐれてしまったよ。君が大好きだったビーフストロガノフを前にしてインビジ・ブルーが解けないなどと。しまいには僕の作った料理を、つまり延いては僕を『なんか』呼ばわり。僕はもうどうしたらいいかわからなくなってしまったよ。」

親父は仏壇を前になぜか十字を切りながら涙と鼻水を拭いたティッシュの山を早くも二つ築いている。

「もう僕は伸に必要とされない存在なのだろうか。いっそ、この世界から消えてしまったほうがいいのだろうか。ああ、深雪、消えて

しまつなら君のそばに行きたいよお……」

ふわりと風が吹いた。

風に乗せて、親父を中心に『世界』まで希薄になっていく。

親父が消え、天井が消え二階の天井が見える。

畳は消え地面が見え、そしてその地面も綺麗な円形になくなって見える。

次第にその範囲は拡大し、どんどん周囲を侵食していく。

—— やばい。このままじゃ『最後まで』消える。

俺は眉間のしびれるような痛みも流れる血もお構い無しに食卓に並んでいた熱々のビーフストロガノフを無理やり全部かつ込み、肺にいつぱい空気を吸い込んだ。

「あゝ！この料理超ウメー！！おかわりはないのかなー！やっぱ親父の料理はサイコーだなあああああ！！」

部屋の片隅にある緊急時用メガホンで、仏壇のほうへ聞こえよがしに大声を張り上げた。

「……………」

あの親父の『ネオ・インビジ・ブルー』圏内に入ってしまったが最後、アイデンティティーは崩壊し、自己と自我を保って親父を説得する自信はまったくない。

となると、褒め倒してテンションをあげさせるしかない。

向こうの反応はない。

下手をするとそろそろ能力の範囲がここまで迫ってくる。

一つずつ、第六感の赤ランプが点灯していく。

「いやあ、そこまで褒められるほどでもないよ。でも、今日の夕飯はよく出来たと自負しているんだ。さあさ、おかわりを盛ってあげよう。」

何事もなかったように戻ってきた親父は戦慄しかけている俺をよそに山のように米を盛り始めていた。

警戒の赤ランプもレベルを下げ、とりあえず黄色に戻る。

――疲れる。

早々に食事をすませ（しかし、限界まで食べさせられたのは言うまでもない）仏壇のほうを覗きに行くと、お袋の写真以外の畳、天井、仏壇、ティッシュの山などはすべて原形をとどめないほど歪んで固着していた。

「俺も、そのうちこうなっちゃうのかな……マジで。」

俺は無意識に身震いをしてしまうのだった。

第三話『疲れる……』

／五分前。

「ビーストロガノフ〜♪ビーフなストロガノフ〜♪ビーフでストロガノフ〜♪たっだいまー！」

「おかえり、明巳。何かいいことがあったの？伸君と仲良く帰ってきたとか。」

おっとりとした、しみこんでくるような静かな声を発したのは、玄関まですべるように出迎えに来てくれた和服を着た母、かぶらぎ 鍋木 あげは 揚羽 だった。

「なんでそれがいいことなのよ。まったく、カンチガイしないで〜。それよりおなかすいちゃった。」

「じゃあ、すぐご飯にしましょう。あの人を呼んできて頂戴。」

「はい。」

私は一直線に部屋に戻り四十秒で着替えて、離れの道場に移動する。

「パパ〜ご飯できたってさ〜」

人の気配がない、暗幕をおろした様に暗い道場に私の声はしみこんで、すぐ消えた。

瞬間、後ろからがつしりと抱きつかれ、身動きが取れなくなる。

私は瞬時に右足を一步下げ後ろの暴漢の足を容赦なく踏みつけ、体の正中線に沿うように腰の辺りで合掌したまま、息を吐きながら万歳をする。

すると綺麗に、私を抱きしめていた腕はすっぽりと抜けてしまった。

「セイツ！」

その勢いのまま振り返りそこにあるひとときわ黒い影の真ん中に真っ直ぐ拳を突き出す。

それは、影を殴りつける直前で静止した。

「はい、お仕舞い。ご飯だつてさ。」

パツと電気がついた。

目の前に立っていたのは第一印象として『地上最強の生物ですか？』と問いたくなるような巨軀の野生的な男。

彼が父である鏑木牙羽。かぶらぎ

「明已お帰り。でもな、勝負つてのは抱きつかれた段階で負けなんだぜ？相手がレスリングとかグラウンドを使うタイプの変態だったなら、その段階でお前は美味しく食べられちまつてるわけだからな。」

「下品。」

私が繰り出した拳は違ふ事無くパパの顔面のだ真ん中にめり込んだ。

「はっはっはっ、そう、それでいいんだ。さすがわが娘。」

鼻血をたらしながら尚、仁王立ちで平然とからから笑い飛ばす牙羽。

――疲れる。

「わかったから。母さんが待つてるから早く夕飯にしよう。」

「おう。そういえば腹が減った。」

居間へと移動する。

食卓について、私がわくわくしている目の前に出てきたのは、お隣さんのはずのロールキャベツ。

「デストロイ！？なんでここにロールキャベツが！？」

「何でといわれても、私が昼間見ていた番組で、ものたんみさんが美味しいロールキャベツの作り方をやっていたからなんだけど。」

「と、トマトはだめなのよお…しってるでしょお…」

「ああ、そういえば小学生のころ、蒼咲の仲坊を道場に連れてきて、空手をさせたら顔を真っ赤に腫らせてトマトみたいだって怖がってたもんなあ。」

当時を思い出してガハガハと豪快に笑い飛ばしてから、当時の明巳

を思い出して悦に入るパパ。

それを見やって、おっとりと笑ってから、思い出して申し訳なさそうにママは口元に手を当てた。

「そうだったわね。ごめんなさい明巳。」

「なーに、嫌いなモノの一つや二つあったほうがかわいげがあらいまして、伸坊を思い出すからだってんだからいじらしいな。」

「な、なんだっての！？別に、そんなんじゃないんだって。ああ、そうですか。そんなんじゃないんだから、美味しく食べさせていただきますから。」

流し込むように夕飯を済ませて、自分の部屋へと駆け込んだ。

ベッドに座り込んで、携帯を開く。

『でも、もし、その本物のストーカーが出てこないで、諦めちまったらどうするんだ？』

不安そうな伸を思い出して。

「もしダメだったら、このやり取りを義美に聞かせるから、何の問題も無いんだけど。」

携帯からは、先程の伸とのやり取りが録音されたものが流れていた。彼女がストーカーに狙われているから、それをあぶりだすために自分がその汚れ役を買って出ているのだと、普通に聞けば誰だってわかるやり取りが。

「あゝあ。伸の馬鹿。……まあ。私のほうが、馬鹿なのか。」

ころりと寝転がったベッドは柔らかかったけれど、どこか、冷たい気がした。

第四話『追憶×夢』

その影は、僕を取り囲むように一定の距離を保ちながらおのおの小刻みに揺れていた。

たまにその影の塊から分かれたいくつかが、人の頭のような形になって、不愉快なあのときのことを語ってくる。

『ああ、伸くんね、あの子少し気持ち悪いのよねえ。』

『そうそう、そこにいたかと思えばどこかに消えていたり、居なかったと思つたらすぐそこにいたり。なんだか気味が悪いのよ。』

『他のことあまり仲良く遊ぼうとしないし、それをいつも見ていきやなのね。それにすぐ居なくなるから仕事が増えるのよ。』

『そうそう、まるで神隠しにでもあつたみたいにすぐ居なくなるのよね。』

『はじめは驚いて一生懸命探したんだけど、こう何度もだどこっちとしてもね。』

やめて。

僕は、別に消えたくて消えてるわけじゃないんだ。

影にはまるで薄い三日月に裂けたように穴が開き、笑みを浮かべているように見えた。

『わざとなのかしら。まあ、父親も仕事仕事で忙しいみたいだし、母親もあの子の弟が死産でその後すぐに…』

『まあ、寂しがりやっていえば聞こえはいいけれど、正直私はあの子のクラスの担任にはなりたくないわ。』

これは、いつか聞いてしまった保育園での――

嫌だ。

やめて。

聞きたくない。

なんで、誰も僕のこと気付いてくれないの？

こんなチカラなんて欲しくなかった。

『一応、ちゃんと見つけないと保育師としての面子がアレなのよね。』

『

『シッ！園長先生がそろそろ来るわよ。続きはまた後で。』

「いやだ――ッ！」

耳を塞いで駆け出していた。

周りを円形に取り囲んでいた影は僕をよけるように裂けて、後ろでまたゆらゆらゆれている。

体がどんどん薄くなる。センセイたちの声が僕にしみこんで、僕から存在を盗んでいく。

走って、走って、走って、保育園の裏の小さなフェンスの穴から抜け出して、たどり着いたのは保育園と家のちょうど真ん中くらいにある小さな公園だった。

あるのは動物型の穴あきドームと小さな滑り台と砂場だけ。

そのドームの穴から中に入っずと泣いていた。

すすり泣きの声がドームに反響して一緒に泣いてくれているようだった。

誰も気付いてくれない僕のこと気付いてくれるたった一つのもののような、

ガアワアワアワアワア~~~~ン!!!!!!

「ヒッ……!?!」

急にドームが殴られたみたいなすごい音がして、耳を抑えて体を縮込ませた。

二、三回それが続いて、やっとおさまったかなあと恐る恐る目を開いたら、目の前の穴から鬼の形相で覗き込んでいたのは、一週間くらい前に隣に引っ越してきた女の子だった。

『男の子がめそめそ泣くもんじゃない!っておじいちゃんが言ってたんだから!』

女の子は穴から手をつ突っ込んできて、無理やり僕をドームから引っ

張り出した。

円形の穴から僕を引つ張り上げる彼女。
背には、穴から漏れる光が後光がのっているように見えて、とても

ベカリ。

平手が頭に入った。

「あうっ」

『ほら、もう。しょうがないな。隣のしんちゃん。はやく戻らないと先生に怒られちゃうよ。』

「あ、……ちゃん。僕あそこには戻りたくない…」

『ねえ今！私の名前忘れてごまかしたでしょー！？かぶらぎあけみ。あけみだから！』

ベカリ。

また頭を打ち下ろすような一撃。

「痛いよ。もうやめてあけみちゃん。」

『そう。それでいいの。で、さっきの聞こえなかったけど、なんかいった？』

ボギ、ゴギ、パキ、ポキ。

保育園に通っている女の子が拳からさせちゃいけない音オンパレード。

「……………なんでもない。」

『じゃあ戻りましょ。』

ぐいぐいと腕を引つ張つてあけみちゃんはにこりと笑った。

「ぼく、今誰にも気付いてもらえないもん。どうせ」

『いいじゃん別に。私は気付いたし。その消えちゃうやつ、私はう
らやましいとおもっけどな。』

だって、つまみ食いいっぱい出来るでしょ？なんてあけみちゃんは
わらっていたっけ。

それで『二人とも』センセイにたっぷり怒られたんだ。

第五話『祇園愛生』

一週間前、新宿で買った自分専用の安眠枕に顔をうずめた。

こういつときのために、買ったこの枕。

深呼吸して酸素を蓄えて息を止めた。

ざ、ざ、ざ、ざ、ざ。

かち、かち、かち、かち、かち。

まるで私の中を軍隊か何かが行進している足音のように、慌しい鼓動は響いてくる。

時計の秒針の音よりも早い。いつもより、およそ。二秒は早い。

枕に顔を押し付けたまま首をひねる。

ごろり、と頭だけ向き直り、新鮮な空気を吸い込んでみる。

かすかに、昨日の十時ごろ焚いたアロマキャンドルの甘い香りが残っている。

銀色の時計を凝視する。

午前四時四十七分。

まだ、午前四時四十七分。

今日はまったく一睡も出来ていない。しかし、不思議と体も頭も休まっている。

体調は、不思議とこれ以上なく万全なのだ。

まだ真っ暗である。

カーテンに遮られ、月明かりさえ届かない時計を見つめ、そっと自分の首に手を触れてみた。

ど、ど、ど、ど、ど。

かち、、かち、、かち、、かち、、かち。

また、早くなった。

そして、予感確信になった。

もはや全身で、今日の何かを感知している。

きつと今日は、大スクープがある。

ううん、きつとじゃなくて、絶対に。

「ふふ、ふふふふふふ」

彼女はベッドの中で芋虫のように二、三度蠢いてから勢いよく布団を撥ね退ける。

同時にベッドに合い向かいに設置されている檜の机の上のリモコンを取り上げ、電気をつける。

一秒ほどして蛍光灯の光で照らし出された部屋には、パソコンから部屋中の小箱に通じたコードの束が壁に沿い天井に向かっていて、そして天井では細分化したコードが縦横無尽に走っている奇妙な光

景だ。

彼女は目を細めて、光に目を慣らしてから角のない長方形の下縁メ
ガネをかける。

腰にかかるくらいの流れる黒髪を手で梳いて整えた。

東側にはクローゼットと入り口、そして先程の机が設置されている。

年頃の女の子が扱う机にしてはかなり簡素というべきか。

せいぜい櫥の造りによくあう、蔦をあしらった写真たてが二つ、そ
して三センチほどのパンダの縫い包みが三つ、例のコードがついた
小箱が二つほど乗っているだけ。

そして部屋の南側にもはや壁といって良いほどの巨大な本棚が四つ。
そのうち二つを締めているのが色とりどりの圧倒的な数のアルバム。
そして残りがカメラや風景などに関する資料、そして心理分析の小
難しい、主に犯罪心理学の分厚い本だ。

西側にはベッド。

北側には頑丈そうなチタン製の棚。

シルクを被せてある何かが大量に入っている。

元は正方形の部屋は、南、北側の巨大な棚のせいで、やや歪な長方
形になっている。

「何だろう。今日は、どんなスクープなのだろう。」

北側の棚を開く。

シルクをどけて、一際大きな何かを取り出した。

それは、一眼レフのカメラだった。

専用の布でレンズをふき取る。

そして首にかけた。

そう、およそ高さにして一メートル七十センチ、幅にして一メートルほどの棚に収められている無数の物体は全て、彼女のパートナーたるカメラ。

「後は、これだ。」

そしてパソコンの横のデジカメを手に取り、そしてパソコンの起動画面からあるアイコンをクリックした。

彼女は小日向高校二年生。

新聞部きつての敏腕とされる女部長、ぎあん あいき 祇園愛生だ。

パソコンが起動する。

フォーン、なんてファンの音がして、そして三度、電子音が鳴り響いた。

「レディ……」

部屋の中心で左手にデジカメを持ち直して、愛生は脱力した。

ピー。

一際長い三度目の電子音が終わると同時だった。

ベッドの下に隠すように設置されている箱から、鳩をあしらった縫い包みがひょっこりと顔を覗かせる。

「売！」

振り向きざまにデジカメでそれを撮影。

それを認識したかのように今度は真後ろの机にマンガース、天井の中心にインコ、出窓の隙間に白熊、本棚の上に獺の縫い包み。

「貳、参、四、伍！！」

次々にアトラダムに現れる動物たちを全てそのカメラに収めていく。

そして一分。

「貳拾八。」

ファファー、なんてファンファーレがパソコンから鳴り響き、全ての小箱から現れた縫い包みは再びその箱の中に身を隠すように勝手に勝手におさまった。

「よし。手ブレなし、ピンボケなし、撮り逃しなし。完璧。」

いとおしむように愛生はもう一度胸にかけた一眼レフに指を這わせた。

「早く、日が昇ってくれないかな。」

カーテンを開けて外を見やる。

星はほとんど見えなかった。まるで神様が寝タバコをして夜に穴を開けてしまったように、ポツリと真円より少しかけた月だけが浮かんでいた。

第六話『有毒親友』

カーテンの隙間から差し込む朝日が胡乱な意識と目に付き刺さる。

「…ああ、…朝か。」

布団をどかす。

寝ぼけたままベッドから降りて正面に用意してある服を手に取り、何でこんなにスムーズに起き上がったのだろうと、苦笑した。

振り向いてベッドに置かれている目覚まし時計を見るといつもの電子音が鳴り響くより十五分ほど早い七時五分をまわったところ。

シャツに腕を通してから、いつものように洗面台と向かい合い、顔を洗い、髪を整える。

「……………あー…」

ため息のような唸りがこぼれる。

いつもより一キロほど頭が重い気がする。

それもすべて、今日これから学校で実行することになっている例の作戦のせいだ。

唸りながら全開に捻った蛇口からは、ざあざあと水が勢いよく噴出し飛沫が飛び散っている。

それを掬い、一度顔を洗って締める。

「ん……………」

目を閉じたままタオルを取り、顔を拭くと、意識は意思に反して覚醒していった。

一階ではパタパタと足音がしている。親父がいつものように朝食を作っているんだろう。

部屋に戻って再び時計を見やる。
いつの間にか七時十五分。

まるで、残酷な時間君は俺を助けるどころかいつもの五割増くらいのスピードで審判の時へ俺を誘おうとしている様だ。

ああ、神様いるなら時間を止めてくれ。

「…学校、行きたくねえ…」

消え入りそうな、最後の弱音を吐いて、壁にかけてある制服を羽織ると――

がごお、ごっわわわわあっ!!
かんからかゝん!

という音がドアの向こうで鳴り響き、蝶番ごと弾け飛びそうなほどの勢いで部屋のドアが開いた。

「登校拒否かっ!? ニート入門なのか!?!」

わなわなと体を震わせ、俺を起こしに来たのだろう、手に持っていた空の中華なべと鉄製のオタマを取り落とした親父が目には涙をためていた。

「あ。……ちが…」

——やべえ。

「み、みゆきいいいい！！！！」

階段を転がり落ちる勢いで誠は駆け出した。

普段身に纏う知的な第一印象などかなぐり捨てて、水面を走るトカゲよろしく激しい足音は確認するまでもなく深雪の仏壇へと向かっていた。

「あああああああつ！！ちくしょう！！」

追いかけるように伸は階段を駆け下り居間へ。

用意されている朝食のうち卵焼きなどを胃に捻じ込んで、牛乳を流し込む。

トーストは包んでかばんに放り込む。

「うまかったよご馳走様今日も元気に学校行ってくるからあとよろしくなおやじ！！！！」

どうせ仏壇を前に十字を切っているのであろう親父に抑揚なく声を張り上げて、能力に巻き込まれないうちに家を飛び出した。

玄関を出るときに奥から「はい、行ってらっしゃい」といつもどおりの声が聞こえた気がしたがもう振り向きもしないで玄関を閉め

る。

「はあゝ。死ぬ。絶対近々、親父に消される。」

「あれ？伸ちゃん。どしたのこんな時間に。」

安堵のため息をついていた伸に、不意に声がかかる。

人当たりのよさそうな聞きなれた声に反応して伸が顔を上げると、そこにいたのは中学からの親友である桜庭圭吾さくらば けいごだった。

生まれついていたのだいぶ強い栗色のやや細い垂れ目を更に下げ、初対面で握手を求められたらまず、無警戒で両手の握手を交わせるであろう柔和ないつもの笑みを浮かべている。

顔はかなり整っているほうだろう。

敢えてマイナスをあげるならその細い垂れ目ではあるが、それもいいつも浮かべている笑みのおかげでさして問題ではないようだ。

背は自称百六十。

いつだったか、一緒に帰っているときやあきやあとスタイルのいい大学生のお姉さんがたが急に圭吾を取り囲み、頭をなで繰り返したことがある。

その勢いに、馬の後ろ足に蹴られたみたいにはじかれて車に轢かれそうになったんだっけ。

「いや、まあ、その。」

ははは、なんて苦笑いを浮かべて小さく深呼吸。

そうこうしていたら、圭吾はなにやら学生かばんの中から三十センチほどの黒い棒——よく見ると折り畳み傘を取り出した。

空を見上げてみても、今のところ雲ひとつないし、まだ入梅には遠い。

「どうしたんだ？いきなりそんなもん取り出して。」

気を取り直して、圭吾と一緒に学校に向けて歩き始めた。

「ん？だつてさ、伸ちゃんがこの時間に起きてきたんだよ？今の時間分かる？」

携帯を開いて時間を確認すると

「七時二十三分……だな。」

ゆっくり歩いていったって二十分。

ホームルームが始まるまでは余裕がありすぎる。

でもそれが傘とどういう関係が。

「これは、降るでしょ槍が。くるでしょ大津波が。起こるでしょ天変地異が。」

ばさりと晴天下、鼠色の道路に黒い八角形の穴があいた。

「あゝあゝ、そういえば圭吾。今日の天気予報、ところによりチョップが降るってよ。」

ゆるりと手を持ち上げて、それを力なく重力に任せ振り下ろした。
がっしりとそれが後ろから伸びてきた手に受け止められたかと想つた瞬間。

「つつはよおー！！どーん！」

すでに朝の挨拶ではなくなっている奇声を元気いっばいに発した明巳のチョップが伸の頭蓋をきしませた。

「ぎいやああああ」

天に手を伸ばして断末魔を上げてから、糸が切れたように伸は倒れこんだ。

「あはは、伸ちゃんがいったとおりだね。明巳ちゃん、おはよう。
今日も元気いっばいだね。」

軽く圭吾は首をかしげて、女の子のように、くすくすと笑う口元に手を当てていた。

「そりゃあね！私の長所は毎日元気に生きてることよ！」

明巳はチョップを振り下ろした伸びきったままの肘を直角に曲げて、力こぶを作るポーズを取ると、満足げに笑みを浮かべた。

「あゝけゝみいっ！！」

爆発したように起き上がり、伸はころころと笑いながら逃げ回る明巳を追い掛け回し始めた。

伸の手が明巳に伸びる。

ちょうど触れるか触れないかの瞬間。

「きゃあああああああああ」

変態に遭遇した女の子のような『伸』の悲鳴が響き渡る。

なぜなら、伸の攻撃に対して、日々武力が積み重ねられている明巳の防衛本能が容赦なく、マシンガンばりの拳を繰り出したからだ。

「まつ、まだまだあ……ぎゃあああああああああ
あ」

「容赦できないわよ？ たあー」

「俺はこんなもんじゃ……！——ぐえええええつ」

「まだ立てるの？ これならどうだッ！」

「ちょ、ちよつとまってく……どわあああああ」

「ゴキブリ並みにしぶとい！ こうなったらッ！！ 奥義！ 滅殺剛硝撃
い」

「ちにゃー！！ おま、え、目的が変わってきてるだろそれ……」

「よかった。いつもの伸ちゃんだ。明巳ちゃんも生き生きしてるなあ。
」

圭吾はスプラッターなそれを見やり、小さく短い安堵のため息をついた。

朝からどこか元気がなさそうだった伸ちゃんをいきなりここまでのテンションに引き上げられるのは世界でも明巳ちゃんくらいじゃないだろうか。

圭吾はうれしそうに一度頷きかばんを背負いなおし、いつの間にか伸を明巳が追い掛け回す形になっていた追いかけてこからつかず離れずの位置をキープする早足に。

五分後。

「ごめん、俺が悪かった。正直、どこも悪くないけど悪かった。だからもう勘弁してくれ。」

学校の校門を目前にして、顔を真っ赤に腫れ上がらせた伸は言葉通り謝罪の意志が微塵も乗っていない形式だけの謝罪を明巳に放り投げる。

「ゴメン、伸。ちょっとやりすぎた。」

「よく見る。これがちょっとだったら警察は天下泰平でお役御免になるっつーの。」

「だからゴメンってば!」

「僕は許すよ。明巳ちゃん。」

「圭吾ナイス!ほら伸、二対一で民主主義的平和解決。」

「明巳大変だ！すぐに町外れの清潔感のある白くて大きくて四角い、いっぱいベッドがある建物にお世話になって来い！」

「なにそれ？」

きょとんと明巳は思慮をめぐらしながら二度ほど首をかしげた。

「分からないなら気にするな。」

「——伸ちゃん、それって確か精神科が有名な大きな私立病院……」

「わっ、バカ圭吾！ささやかな復讐を邪魔しやが……」

「シーンーンあなた余程私の滅殺奥義喰らいたいみたいじゃないか」

明巳は胸の前で拳を握り合わせ、いつものように暴虐極まりない効果音を響かせている。

「ふざけんな。もうすでにこっちは死にかけなのにそんなもん食らってたまるか……」

逃げるように目の前の校門に駆け込んだ。

「……キミッ！」

声が、響き渡った。

第七話『遭遇、ターゲット』

突然、校門横からの声に飛びとめられた。

かすかにハスキーな声質に混ざる強い意志を感じさせる呼びかけに、誘導されるように伸はそちらへ向き直った。

まず目を引いたのはその風に吹かれ、なびいている腰にかかるくらいの黒髪。

シルクのような髪とはよく言ったもので、つややかなそれは風の流れて切れ目ができなければ、上等の一枚布に見えてしまうほど滑らかだった。

視線が髪からその女の人の全体へ。品格と知性を同居させたようなシャープな体のシルエット。

その人は角のない下縁メガネをかけ、やや釣りあがった目で真っ直ぐにこつちを見つめている。間違いなく美人に分類されるタイプだ。

「…俺、ですか？」

面識は無い。

あつたら忘れるわけも無い。それほどの美人だ。

ただこの言葉は初対面だからではなく、まったく無意識に彼女のオラに対して敬語になっていた。

この時間に校門前に立っているのだから、風紀委員か何かなのだろ

うか。

ただ、肩に風紀の腕章はついていない。

確かにイメージだけで言うならばまり役のような気がするけれど。

「そう、キミ。」

彼女のそんな何気ない一言一言には、断定というか有無を言わさない色がある。

かすかに頷いてから、すべるように伸へと彼女は歩み寄り、一気に一メートルほどの位置まで接近してきた。

「な…。」

「キミ、なんて名前？」

「青崎…伸、です。」

伸はドギマギしながら半ば反射で答えていた。

「そう…。」

こぼれたような呟きと同時に目の前に何かが突き出される。

目を細めてみると四角くて銀色で、真ん中に直径三センチほどの透明なレンズ。

——デジカメだった。

「うわっ」

急に焚かれたフラッシュで二三歩後ずさり。

目をこすって再び彼女を見やると、見ようによっては不敵な、でも彼女にはぴたりと似合う笑みを浮かべていた。

「やっと見つけた。青崎伸君。キミのこと、今日一日密着取材しても良いかな。」

「へ？密着……取材？」

「ああ、自己紹介が遅れてしまったね。私は……」

「あ、愛生さん！！おはようございまーす！」

今更ながら明巳が校門をくぐってきた。

アイキ先輩？やはり面識もない。

でも、その名前はどこかで。

「やあ、鎚木くんか。おはよう。」

ばたばたと駆け寄ってきた明巳にさっきとは違う色の優しい笑みを向ける愛生。

「愛生さん、伸と知り合いだったんですか？」

「ん？たった今知り合ったところさ。鎚木くんは彼と知り合いなの

かい？」

「あゝ、家が隣なんですよ。たった今ってことは……伸に何か？」

「いや、何。私の新聞部部长としての勘が、ね。彼を密着取材すべきだと囁くものでね。」

『新聞部部长』という単語が耳から入り電気信号として脳内で組み合わさる。さっきからの疑問がそのピースで一気に組みあがり、脳は答えをはじめ出した。

そう、彼女は学園三美人として有名な、そして悪名高い新聞部部长、祇園愛生先輩だ。

その事件を探り当てる手腕は自他共に認める天才である。

ただし、そのやり口には容赦など無い。ネタとして上等であるならば校長のスクヤンダルだって新聞に起こすことをいとわない姿勢は、教師からみても畏怖の対象であるほど。

俺が今日、ストーカーあぶり出し作戦を実行することは俺と明巳しか知らない。

これは圭吾だって知らない情報だ。

それを、勘で、探り当てるなんて。

「っ！！」

驚いた拍子にはれた頬に痛みが走る。

「おや、どうしたんだい？急に困ったような顔をして。」

目ざとく伸の変化を見つけ出し、ハンターのような笑みを浮かべながら愛生はくるりと向き直った。

「いや、急に学園三美人の一人に一日密着取材させてくれなんていわれたんで、びっくりしたんですよ。先輩。」

「ああ、私のことを知っていたのか。ただ、その呼び方は好かない。好きなように呼んでくれてかまわないから、以後その呼びかただけはよしてくれるかな。」

「分かりました、祇園先輩。すいませんが俺を密着取材のほうはお断りします。」

「おや、なんでだい？」

「いや、あははは。俺つい最近女の子に振られちゃって。できるなら一人で過ごしたいんです。まあ、この暴力怪獣明巳と圭吾は別として。」

「どうも。桜庭圭吾です。はじめまして先輩。」

静かに俺の後ろでたたずんでいた圭吾はぺこりと一度頭を下げた。

「ふーむ。」

目を細めて、手のデジカメを愛でながら祇園先輩は一つ頷いた。

「このスキャンダルに関係ありそうな顔だって、そもそも明巳の悪ノリのせいですし。」

痛みで顔が引きつる。それを指差して、ははは、なんて笑いお茶を濁した。

嘘をつくのは気が引けるが、この顔なら嘘とばれることも無いだろう。

ストーカーあぶり出し作戦どころか、新聞のせいで後の汚名返上が出来なくなるほど確定でストーカーに仕立て上げられるのは断固拒否だ。

「それに、自分で言うのもなんですが、俺はそんなに大きなスキャンダルに絡むようなタイプじゃないと思いますよ。」

「そうか。思い違いなら仕方がないな。じゃあ、今回は諦めることにしよう。時間を取らせて悪いことをしたね。」

手に持っていたデジカメは瞬時に愛生の制服の袖口に引っ込んだ。

「うわあ、すごい……」

圭吾の呟きを聞き流して。

「いえ。今日はいつもより少し早いで、ちょうどいい時間になりました。じゃあ、失礼します。」

「ああ。くれぐれも、今日は気をつけて過ごしてくれよ。私の勘は妙な当たり方をするから。」

「はい。」

あくまで自然に、且つ早足で教室へと逃げこんだ。

「はあゝ。なんだあれ。超能力か？」

あながち、ベクトルは違えどインビジ・ブルーのような能力なのか
もしれないと戦慄していると。

「伸ちゃん。さっきのあれ、嘘だよね。」

思いつめたような顔で、圭吾が俺の前の席に座り込んだ。

「何のことだよ。」

「ほら、まただ。分からないと思うの？伸ちゃんこれから何かしよ
うとしてるでしょ。僕にはさっきのが嘘だったってわかったんだか
ら。」

優しい顔を固めて、じっとこっちを見つめ返してくる圭吾。

こうなったらこいつはてこでも引かないことはもう知っている。

まして、ここまで言うほどの確信なのだから、こいつには本当のこ
とを言わなくちゃならない。

——圭吾が、大澤さんの事を好きだったりすると困るから黙ってい
ただけだな。

「わかったよ。ここじゃマズイからトイレに行くぞ。」

「わっかったー」

間延びした声と同時に、たった今の今まで固まっていた圭吾の表情がへにやりと崩れた。

/

「ふふふ、ふふふふふ」

青崎伸。

なるほど、面白い。彼には天性の、他人の嗜虐心を刺激する才能でもあるのだろうか。

私の勘に狂いは無かった。やはり、青崎伸は今日、何かをしでかすつもりだろう。

あの顔の傷は鎬木明巳くんがつけたんだろう。そういう子だ、彼女は。

その点については、なんら、疑問も問題もない。微塵も無い。

そう、問題は、彼が最後に言った言葉が顕著に嘘であること。

「くくく、あははははは」

胸に粘性の高いマグマのようなうねりがわきあがってきている。

場違いな恍惚とした昏い輝きがその瞳に燈っている。

祇園愛生は自慢の一眼レフを分解し、すべてのレンズを専用の布で拭き、クラスメイトたちの視線を気にとめることさえせずにほくそ笑んだ。

クラスメイトたちは知っている。

いいや、彼女の性根をかじる程度でも知っている人物はみな知っている。

あれは、愛生の張った蜘蛛の巣に、上等の哀れな獲物がかかってしまったのだと。

クラスメイトたちはとばかりを恐れ彼女の気を害さない程度に一定の距離を保ち避難。

そして、どこの誰かもしれない被害者にささやかなお祈りをささげてあげるのだった。

第八話『色ボケイゴ』

「というわけなんだけど。説明しなかったのは悪かった。圭吾がもし大澤さんのことを好きだったりしたら、悪いと思っただ。」

別に用を足すわけではない。

ある種井戸端と同義のトイレでは伸が圭吾にことのいきさつ、そしてこれから自分がやるうとしていることを一から十まで説明したところだった。

圭吾は微動だにせずにそれをすべて聞き終え、その細い目を更に細くし、珍しく眉間にわずかにしわを寄せる。

「伸ちゃん。僕が怒っているのはわかるよね。」

「ああ。」

「何で怒っているのかもわかる？」

「わかる、つもりだ。だって、そりゃあ学年の可愛い子ランキングに入っている子を……」

今度は一転、圭吾は眼を見開いて伸の言葉を遮った。
「いや、熱っばい口調だった。」

「違うよ！僕はそんなことを気にして相談してくれなかったことに

怒ってるんだ！」

腕を突っ張って圭吾は声を張り上げた。
念のため人の利用が少ない特別棟トイレまで出張ってきた甲斐があった。

教室だったならどうなっていたことか。

「わかったって。悪かったよ。」

「だいたい、伸ちゃんは僕の守備範囲が一年以上上じゃないとダメだってわかってると思ってた！」

「はあ？………てか、そんな性癖知らん。まあ、その気がありそうだと思つてたけどさ。」

「ああ、今朝の新聞部部长祇園愛生先輩、お目にかかるのは初めてだけどあの人なんか凄くステキだったなあ」

「うわあ」

思わず後ずさりする伸。

圭吾はどこか遠くを見上げ、その目の中には時代錯誤な漫画のキャラクターのように星が浮かんでいる。

「あんな人にリードしてもらったりお願いとかされてみたいししたいなあ」

「はいはい、色ボケイゴ君。妄想の邪魔みだいだから俺は教室戻るからな。」

はあ、と大きなため息をついて伸はきびすを返した。その背に、急にまじめになった圭吾の声がぶつかる。

「結構危ないと思うよ、この作戦。大澤さんにはディープで、それこそ素でストーリーカーまがいファンまでいるからね。……そんなに、彼女が好きなの？」

「あゝ、よくわかんないな。改めて考えるとなんでこんなことをつて気もする。」

半分だけ振り向いて、伸はなんとも曖昧な笑みを浮かべた。

圭吾は一つ頷いて、まあ、そういうところは伸ちゃんらしいけど。とこぼしてから。

「この作戦考えたの明巳ちゃんでしょ！」

やけに自信ありげにぴんと人差し指を立てて見せた。

「そーだけどなんだ？」

そりゃあ、なんて大げさにあおってから。

「こんな無茶な事を伸ちゃんに提案するほどのおせっかいは、明巳ちゃんくらいにしかできないよ。」

「確かに違いない。」

二人で笑い飛ばしてから、どちらからとも無く咳払いをして。

「なんにしても、僕は伸ちゃんの手伝いをするから、安心してよ。」

「……わりいな。」

「ほらほら、そろそろチャイム鳴っちゃうよ。急がないと。」

するりと圭吾は伸の横をすり抜け、その際ほんと肩を叩いてそのままトイレから駆け出した。

閉まりかけの古いドアの蝶番がぎいぎいと悲鳴を上げている。

「本当に、助かる。」

今でも、もしストーカーをしたやつが出てこなかったら、という不安はある。でも、明巳と圭吾のおかげで、肩の荷が下りた。

失敗しても、大澤さんは被害から救われるんだろうから。

二人が真実をしっていてくれるなら、失敗してもそれほど悪くない気もしたから。

ぎっ！と強い音が鳴り、再びひょこりと圭吾が顔を出した。

「ほら、次は数学だから遅刻するとマズイって。」

「やべえ、忘れてた。」

伸はあわてて飛び出すと一気に階段を駆け上がり、圭吾の並びで教室へと飛び込んだ。

第九話『あけみつつこのいちげき！しんはいきたえた』

授業が終わり掃除が終わり、HR終了の最後のチャイムになった。

すぐさまグループを作り出してこれから遊びに行く算段を立てるもの、またあるものは大きく伸びをしてから机に突っ伏し、あるものはピンと背筋を伸ばしたまま次々に荷物をまとめ、あるものはすぐさまジャージに着替え部活に向かう。

何のことはないいつもの光景の片隅で、わずかに伸は肩をこわばらせた。

「あゝ、ついに審判の時。鬱だな。」

「ほらほら、気合入れなさいよ！」

そんな伸の背中に、いつの間にか近付いてきた明巳のいつものような強烈な張り手が打ち込まれる。

「つつつつてえー！！てめっ明巳！たまにはおとなしく…」

「無理。伸がうじうじしててむかつくから。私は先に義美と合流しているからさ、後からきてよ。ごたごたの間で義美をどうこうしようとする輩は私がしとめるからさ。」

「あゝ、わかったよ。んで、俺は本物があぶりだされるまでは逃げ回ってことだろ？ストーカーが見つかったら即連絡してくれ。」

「わかった。伸…」

「何だ？」

「死なないでね。」

やや引きつった顔で、明巳はそんなことをぬかした。

「てつめえ、ここでそんな事言うかフツー！？」

「あはは、それもそうだ。」

ケラケラと笑いながら、明巳はまた伸の背中をバシバシと張り飛ばす。

ちらりと明巳を見上げて小さく息を吐く。

まったく、不安なら俺のことなんて放って置いてそんな損な提案をしなけりゃいいんだってんだ。馬鹿だな、まったく。

「明巳こそ、ストーカーが出てきて危ないと思ったら、すぐに逃げるよな。」

「ええう……わ、私の心配してる余裕なんて無いでしょ！私がインターハイ優勝経験者だって忘れたのかな？」

「ああ、なるほど忘れてた。だからすぐ手を出すのか。」

ぼぐっ！という鈍い音と一緒に伸の旋毛に踵落としが決まる。

振り上げられた足で、スカートが揚羽蝶の羽根の様に丸く広がる。

くりぬいた様な白と水色のストライプが濃紺の花の中心に出現した。

「お前、パンツ丸見えだぞ。」

「うっ！」

ぱつと、これでもかというくらい真っ赤に明巳の顔が染まる。

「馬鹿あああ——！！！」

ビュゴウ！

メゴツ！

なんて大きく振りかぶった不恰好なストレートが無防備な伸の横っ面にめり込む。

「ぎゃああああ」

勢いあまって机を吹き飛ばし、伸はキリモミ回転しながら頭から窓際の壁に激突した。

「知らない！もう先に行ってるからどうにでもなっちゃえ。」

逃げるようにばたばたと荷物をまとめ、明巳は教室から飛び出していった。

「ま、待て……明巳……ヤバ……これ、死ぬ……」

ぱっくり割れた頭から大量の血を流しながら震える手を教室の後ろのドアに伸ばしてしばらく。断末魔が終わるとその手は力なくぱたりと地面に落ちた。

第十話『出陣』

「あの、すみません誰かいますか？」

圭吾は半分だけ開いた視聴覚準備室のドアから頭だけ室内に突っ込んで、おっかなびっくり声を張り上げた。

「あの、ここが新聞部の部室だって聞いてきたんですけど、誰かいますか？」

「用があるならまず入ってくればいいだろう。」

顔も覗かさずに奥から声が帰ってきた。紛れもなくその断定的な声は今朝聞いた祇園愛生のもの。

「はい、失礼します。」

遠慮なく踏み込んだ。踏み込んだとたんふわりと紅茶の香りがした。U字型に棚で仕切られた向こう側へ回り込む。そこではこともなげに紅茶を飲みながら、視聴覚室のパソコンで新聞記事をまとめている祇園先輩がいた。

つい、と事務的な動きで顔を上げ、わずかに愛生は眉を上げた。

「君は今朝の桜庭君だね。」

愛生が左手を伸ばすと、制服の袖口からは勢い良く漆黒の手帳が飛び出して手のひらにおさまった。

どこから取り出した鍵を、その手帳のベルトについている鍵穴に入れ、中の何かを読み、ふむふむと一人頷く。

「どうしたんだい？君は応援部に入っているようだけれど、今この新聞部に応援は必要ないはずだ。まあ、私と一年生が一人だけだから人手こそ足りないといわざるを得ないものの、ね。」

応援部というのは一時的に部員が足りない部活、人手が必要な委員会などからの要請を受けて人員を派遣するこの学校独自の部だった。部員になるには相応な条件をクリアする必要があるが、入ってしまったえば要請が無い限りは帰宅部と同義であるというもの。ちなみに伸も応援部である。

「あの、僕この新聞部に入部したいんです。」

先程とは違う、怪訝そうな表情で眉を持ち上げる愛生。

「応援部は掛け持ちを禁じてはいないようだけれど、一体どういうことだい？」

「なんとというか、祇園愛生先輩みたいな素敵な人の下で部活動をしたいんです！」

また、ふむむ。なんて唸ってから、愛生はティーカップに残り半分ほどの冷めかけの紅茶を一気に飲み干した。

「悪いけどお断りだ。そういう動機で入部志願する者は人手が足りなくてもゴメンなんでね。」

愛想笑いにしては綺麗過ぎる笑顔を浮かべて、はっきりと拒否の意を表した。その笑顔はなまじ不快な顔をされるよりもよっぽど他人を拒絶しているように見える。

「そこを何とかお願いします！この愛生先輩への情熱は等しく新聞にも向けられるはずです！」

柔和な笑顔で平然と愛の告白まがいのことを言っただけのける圭吾に苦笑して、では。と愛生は前置きをした。

「今日中にその類まれなる情熱で私が納得するスクープを見つけ出して来れたなら入部を認めよう。」

「それなら、すぐにでも。」

なるほど、常に笑顔の桜庭は、その表情から心情を察することが出来ない。たいしたものだ。

意味を図りかねて口元に手を当てる愛生。

「どういうことかな？」

「これから伸ちゃんが、昨日ふられた一年生の大澤義美さんにある重大な告白をしに行くんですよ。それが大スクープです。」

「ほお。」

再び封を解き、愛生は自分の手帳を読み返す。

「私の調べだと、青崎伸クンとキミは親友とっていい位置づけだったはずなんだけれどね。新聞部に入るために彼を売る、と？」

愛生の口には不敵な笑みが浮かんでいる。それはその卓越した女の勘ともパパラッチの勘とも言えるものが、その言葉が真実で、さらに予感していたスクープに繋がると告げているからだ。

圭吾は笑顔を崩さずに、わずかばかり頬を高潮させて。

「勘違いしないでください。愛生先輩に認めてもらうために、ですよ。」

「ふふふ、それは光栄だね。では、実際に行ってみようか。このスクープが納得いくものだったなら、キミの入部を認めよう。」

さらりと立ち上がった愛生は、自慢の愛器が入っている漆黒のバックを肩に引っ上げた。

「あ、荷物なら僕が…」

「結構。これは私の武器だからね。」

圭吾の申し出をばっさり切り捨てて、愛生は準備室の扉を開いた。

圭吾は愛生の背を、目を細めて見つめる。

放課後の傾いた日の光が差し込む廊下を愛生の向こうに見越して。

思わず敬礼をしたくなるくらい、その『出陣』は勇ましかった。

第十一話『告白、酷薄』

落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け落ち着け、おちつけおちつけもちつけおちつけおちつけ！！

伸は大澤義美がいるクラス、一年九組の教室のドアを前に深呼吸をして、覚悟を決める最後の深呼吸をした。

とはいえ、その深い深呼吸が緊張のあまり何度も何度もエンドレスで繰り返され、異常な変質者風味の荒い呼吸になっているのに、渦中の伸が気づくはずもない。

クラスに入るに入れない学生たちが、思いつめたような顔の伸にプレスシャーを受け、これから何が起こるのか遠巻きに固唾を呑んで見つめていた。

心臓が早鐘のようになっている。手のひらにじっとりと汗が浮かんでくる。

どくん、どくん、どくん、どくん、どくん。

いくら肺に酸素を取り込んでもそのまま吐き出しているんじゃないかというくらい頭は真っ白。

背中には生暖かくて重いくせに、滑り落ちるときには驚くほど冷たく凍りついた感触の汗。内臓の奥がしんと冷たい。

おちつけおちつけおちつけおちつけ！

そうだ、思考を切り替えればいい。

この不安も、この悪寒も、この倦怠感も慣れてしまえば不愉快を通り越して一周回って快感に……

「なつてたまるかボケエ！コンチクショウめええ！！！」

危ない危ない。危うくあつちにギリギリ半歩踏み込みそうになってしまった。

自分に突っ込みを入れた伸は額の汗を拭った。

幾分冷静になり、周囲の様子をきょろきょろと確認する。

「はあゝ、よし。」

その瞬間にあるものは物陰に隠れ体を丸めて目と耳を必死に押さえ、あるものは勢いよく目をそらして壁と恋愛相談をし、あるものはどこかへ電話をかけてどこそこの株をありったけ買い占める、だの叫んでいる不自然極まりない風景なのだが、今の伸には気付けない。

がらりとドアを開く。

その瞬間、九組のすべての目は伸に向いた。

（あれ？何でみんなこつちを見てんだ？ああ、クラスが違うやつがいきなり来たからか。）

もうすべての事象を基本自分の都合のいい解釈へと誤変換する伸の頭脳。

向こう三クラス先まで響き渡った叫び声が当然九組に響かないはずは無い。奇しくも伸は大澤義美に大衆監視の下で告白するステージを自ら作り上げた。

正面を見据えると、窓際最後尾にある机では義美と明巳が向かい合いに座っていた。

明巳のほうは俺を見てやや引きつった顔をしているものの、よし、よく来た伸！と口だけで訴えかけている。

当然、伸の事を見た大澤義美はというと、露骨に表情にさえ出さないもののわずかに肩眉を持ち上げた表情が、警戒していることを物語っている。

周囲のイタイ視線の中、腹をくくって真っ直ぐに二人の元へと進む。

「なん、ですか。青崎伸さん。もう、お話することは無いですよ。」

「一つだけ。」

一つ咳払いをして伸は鋭い義美の視線に自分の視線をぶつけ、そして気を付けから体を九十度に折る。

「ストーカーして体操着とかパクツたのは俺です！すいませんでしたー！！」

パンツ！！

パシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！！！

すべての静寂を一瞬の間さえなく打ち破ったのは伸が入ってきたドアを勢い良く開いた音と。

「大スクープ！！アハハハハハッ！！」

パシャパシャという、伸を収めるカメラのシャッター音。そして愛生の高揚した笑い声だった。

「げっ、なんで！？」

ザン。

地震のような震えと音がした。

愛生から目をそらし、恐る恐るクラス内へと目を向けると、殊更屈強そうな男たちが義美の合図一つで穢れた虫けらを殺さんと仁王立ち。

その隙間ではそんな目で見られたら三回は泣けちゃいそうなほど冷たい女子たちの侮蔑のビーム。

泣いちゃダメだ、泣いちゃダメだ、泣いちゃダメだ！

でも逃げなきゃダメだ！

「ねえ、ストーカーさん。」

「はい？」

あゝ今俺のことストーカーさんって呼んだよオオサワサン。

ホントは違うんだー！でももう手遅れだー！

脳内で頭を抱えてウンウン唸ってみても当然自体は好転してくれない。

諦めて素直に振り向く。さっきまでの怪訝そうな表情はない。代わりに驚くほど無表情だ。

「私の筆箱を盗んだのもそうですか？」

「…そう。（ホントは違うんです。）」

パシャ。

「じゃあ、私の靴箱に『お弁当は愛の大きさだけ』っていう紙と一緒に、はち切れそうなほど一杯のおにぎりを詰め込んだのもですか？」

なんだそれ。本物のストーカー馬鹿なんじゃないのか？て言うか誰か気付け！

「……そう。（本当に違うんです。）」

パシャパシャパシャパシャ。

「そのくせ、いつの間にかすり替えた私のお弁当には私の写真と大量の白濁半固形のゲル状のものを詰め込んでみたりしたのもですか？」

うわあ、いつちゃってるなあゝ本物。

「そ……そう。（そんなこと考えたこともないんです。）」

パシャパシャパシャパシャ…ジー…カシャパチ…パシャ。

「っていちいち返事のたびに撮影しないでくださいよ！もう一本使い切っているしー！」

パシャパシャ。

「フッフ、キミ、この状況で私に突っ込みを入れていられるほど余裕なのかい？」

「……ですよ。」

「へ……？」

再び大澤さんのほうへ向き直った。とても不吉な言葉が聞こえた気がした。

「ストーカーなんて、死ねばいいんですよ。」

ポツリと。

大澤さんは無表情のままそこぼした。

ザン。

クラスの男どもが一步踏み出した。

大元帥の一言で、大澤義美大好きファンクラブ通称ダイダイクラブは殺人集団、青崎Die Dieクラブへと変貌を遂げた。

野球部のヤツはバットを取り出し、陸上部のヤツはとびつきリスパイクの尖ったシューズを履き、柔道部のヤツは白帯で首を絞めようと手に巻きつけている。

こゝ、殺される！こいつらマジで俺を殺す気だ！

にじり寄るようにダイダイクラブの連中は伸との半径を縮めていった。

視線を一瞬だけ明巳に流す。明巳は密かに窓の鍵を開けていた。

「はいはい、殺しちゃまずいからほどほどに制裁加えるだけにしておきなよ。」

いつの間にか撮影しやすいように教壇の上でカメラを構えている愛生。

「「「「「ウス！」「」「」」」」」

暴徒になりかけの男たちも律儀に体育会系の返事を返して。

「ストーリーなんてえええ！！」

「「「「「死ねばいいいい！！！！」「」「」」」」」

スローガンをいつせいに吼えてから伸に向けて飛び掛った。

「殺されてたまるかぁー！」

伸は真っ直ぐに義美のほうへ駆け出した。

「ぬおおっ！卑怯な！義美ちゃんを護れええ！！」

「人質にされるぞおっ！」

「義美がああ!!」

「あ、テメエ!何どさくさに紛れて義美様を呼び捨てにしてんだよ!」

「大澤さあああん!!」

「どこかに救世主はいないのかあ!」

真っ直ぐに駆け寄る伸に対して、建前上、明巳は庇うように大澤さんに抱きついてた。

「でかした鎚木さあん!!」

「救世主はそこにいたあ!」

「ざあんねんだったな青崎伸、いやストーカー!」

「があはっはっ!俺たちも苦汁を舐めた鎚木さんの腕っ節は折り紙つきよ!」

奴らも苦汁舐めたのかよ……

(サンキュ)

視線でそう訴えかけて明巳をすり抜ける。かすかに明巳は頷いたように見えた。

「」「」なあ!?!机を踏み台にただとおお!!」「」「」

大澤さんの机を踏み台にして、さっき明巳が鍵を開けてくれた窓を開け放つ。

ここは二階。

でも外は中庭に当たる。飛び降りても庭園の土は衝撃を減らしてくれるはず。

「飛び降りる気だ！」

「に、逃がすなっ！！捕まえろお」

いっせいにファンクラブの連中の手が伸びた。数本はどさくさに紛れて義美にも伸びた。寸でのところで捕獲の手は届かない。

意を決して伸は飛び出した。思っていた以上にうまく着地でき、殺しきれなかった勢いで一度前転してからすぐさま駆け出していった。大義名分が出来たと明巳は近付く数人のファンを一瞬にして叩き伏せる。

「どさくさで義美に手出しするヤツは私が赦さないからね。」

背に庇うように義美の前に明巳は仁王立ちをした。

「おのれこいつらあ！！うらやま……ゴホン。とんでもないことをしようとしやがってえ！」

「とりあえず鉄拳制裁！鉄拳制裁！」

「「「ギャー」「」」」

「さっき呼び捨てにしたお前も鉄拳制裁！」

「ギャー」

ぼこぼこにされ、簀巻きにされた哀れな男が、数人教室の隅に積みあがった。蟻塚みたいに。

「ハ、こんなことをしている場合じゃない！即刻ストーカーを捕縛せねば！」

「その役目は野球部の部員がはずかったあ！」

ファンAの声にすでにユニフォームに着替えていた野球部員たちが拳と共に闘をあげる。

「な、なんで野球部がでしゃばるんだ！！」

「なぜって、野球部が一番メジャーだからだ！」

「野球部ファイッおおおおおおお！！！」

ファンBの声にいつの間にか教室の外に集まっていた野球部員たちも声を合わせて吼える。

「ふざけるな！！それを言うならサッカー部だって負けてられない！！」

同等の戦力を有した、ユニフォーム姿の男たちが肩を怒らせて野球部のメンバーを威嚇し始める。

なぜか全員サッカーボールを肩の高さに持ち、かつらを被せて部員数を倍に見せようと無駄な努力をしていたり。

「なにを世迷いごとを！荒事を解決するにはタマコ口遊びは力不足！ここは空手部におまかせあれい！」

「うるさいぞ空手部！胴着の下にパンツはいてないくせに！」

「なあっ！？そついうお前たちは柔道部！お前たちこそ水虫のヤツが裸足ですり足をした畳に顔を擦り付けているくせに！」

「み、みなさん、喧嘩はダメですよ。だから、間を取ってわがパソコン研究……」

「……黙れ文化部！……」

「……なんだとお！文化部を侮辱しおつたなあ！脳みそまで筋繊維の獣たち風情があ……」

「……なんだとお！筋肉エノキダケの軟弱もの風情が大澤さんを護れると本当に思っているのかあ……！！……」

「聞けい脳みそ筋肉共！オセロ部はともかく将棋部の戦略をなめるなあ……」

「な、将棋部め！どさくさに紛れてライバルを蹴落とそうなどと性根の曲がつたことしやる！」

「思い上がるなオセロ部。将棋部のライバルは囲碁部に決まっているだろっ……」

文化部運動部くんずほぐれつムツサイ大乱闘がちらほら始まりかけたときだった。

「静まりたまえ！」

二つの手拍子と共に、巻きわらを両断する日本刀のような声が響いた。

顔を、蜜がびつしり詰まった林檎のように真っ赤に染めていた男たちと、男の醜さにさめざめとしている女の子たちが一同に、教卓の上で仁王立ちしている一人の女子に釘付けになる。

「やれやれ。ポイントを稼ぎたいのは分かるが、もっとスマートに出来ないものかな。」

愛生が肩と平行に右手を伸ばすと、その手のひらには無線機のようなものが袖口から飛び出してきた。

『急に失礼。』

ブツッなんて音がして、無線機に向けて発せられた声は全校放送になっていた。

「すげえ…校内放送をジャックした……」

『現時刻をもって、一年四組の青崎伸を一年九組の大澤義美君のストーカー容疑者として指名手配。くれぐれも、校外に逃げ出すことがないように、みな注意してくれたまえ。』

「何時まで隠れているんだい？出てくればいいだろう。桜庭君。君の情報は有益だった。合格だ、晴れて、君を新聞部に迎え入れようじゃないか。」

「あ、あははは。失礼しまゝす…」

かすかにバツが悪そうに、廊下の柱の影から頭を掻きながら圭吾はひよっこりと教卓の横に移動した。明巳は驚いたように目をむきそれを見つめる。

「それと、興味が無いのは結構だけれどねキミ、スクープを前に腰をあげないのはいけないな。」

愛生は視線を廊下側最前列の席に座つて、こともなく自前のカメラを手入れしている男子に呆れた様にため息をついた。

「知りませんよ。人の色恋バカ騒ぎのスクープなんて、僕には微塵も価値がありませんから。」

失笑に近いため息を吐いて、ヘルメットをかぶったようなおかつぱ頭の、頬骨が出張った痩せ型の男は愛生を遠いものを見るように見上げた。

この男は一年九組の真鱈目雅明愛生を除いて唯一の新聞部員であり、またこのクラスではダイダイクラブに所属していないごく少数の間である。

「ふふふ、ちょうどいいじゃないか。」

愛生は三千世界に敵は無しとも言いたげな笑みを浮かべて虚空を

みつめ、再び放送をジャックする。

『風紀、この件は私があずからせてもらうよ。それと、青崎クンを捕まえる上で無用な争いが生まれないように、捕獲部隊を二分。文化部を新聞部員一年真鱈目雅明に。運動部を桜庭圭吾に…』

「あ、あのお、僕は文化部のほうが良いです。」

「ふーむ……まあ、よし。」

『訂正。文化部の総括指揮権を新聞部一年部員の桜庭圭吾に、運動部総括指揮権を新聞部一年部員真鱈目雅明に一任する。二人はファングループに所属していない中立だからちょうどいいだろう。くれぐれも総括の意にそぐわない争いはやめるように。大澤義美君の護衛は一手に空手部一年部員楠木明巳君に一任する。なお…』

愛生はちらりと蟻塚のように積み上げられている哀・戦士たちを見やり、そして今尚ほうけたようにつかみ合いながら自分を見つめる男たちに目を細め。

『異議があるならば直接私、新聞部部長祇園愛生まで。誰が来たとして納得していただけるだけのジョウホウは用意してあるからね。以上だ。』

にこりと微笑んだ。

と、同時に一切の抵抗は自分たちの今後に不利にしか働かないのだと確信した男たちは身震いしてからいっせいに気をつけ、敬礼をして。

「……祇園愛生先輩の意向に異議など微塵もありはしないであり
ます!!」「」

元帥閣下を前にした一兵卒みたいに整列して見せた。

「……つとちよつとちよつとおお!!邪魔ツ!どけっ!な
んか臭い!圭吾チョット来なさい!!ゴメン義美、一寸我慢して!」
思い出したようにソレを蹴り倒し、叩き伏せ、一直線に明巳は圭吾
へ詰め寄り腕をむんずと掴んで駆け出した。ちなみに残っている手
は義美の腕を掴んでいる。

「あ、あ……とりあえず文化部は総力を挙げてストーカーの背景
と現状を洗ってねえ……」

次第に小さくなっていく圭吾の声。ざわざわと揺れてから、実力行
使に出ないことをやや不満そうに文化部の面々は伝令役を残して各
々の部室へと移動し始めた。

「じゃあ、運動部のほうは異種の部同士でバディを組み、各々が校
内を探索。弓道部とアーチェリー部は屋上に配置。見つけ次第周囲
に呼びかけて増員を図り、捕獲後は別名があるまでは手出しをせず
に監視。必要以上に攻撃は仕掛けないこと。ただし、やむをえない
場合は相応の手傷を負わせてもよし。」

「……うす!」「」

真鱈目の言葉に、血に飢えた運動部の面々は同じ二オイを放ってい
るギラツク同士を見つけ出し、再び関をあげながら散開していった。

追いかけるように真鱈目も教室を後にする。

「やれやれ。これで私もスマートに取材が出来る。」

見渡し一息。ふらふらと教卓から降りて、一度自分の武器を撫で回す愛生。

「それにしても……応援部ってのは曲者ばかりだね。青崎はああ見えてやるようだし、桜庭は……何を考えているやら。」

手元を開いた秘密手帳には桜庭圭吾と青崎伸のデータが書き込んである。二人とも応援部のランクはA+。一年にして部長、副部長に次ぐ高評価である。

ランクとは、簡単に言うなら派遣先での期待にどれだけ応えられたか、その派遣先からの評価の積み重ねにより上下する一種の『成功率』の高さで、小日向高校応援部史上異例のことだ。

「とはいえ……。」

無意識に口元が緩む。

「最後にスクープを手に入れるのは私なんだけだね。ふふ、ふふふふふふふ……」

ゆつくりと笑いながら退室する愛生を見やり。大多数の女子はかわりあうことを拒否。何も見なかったかのように顔を伏せ帰り支度を開始する。

ただ、ごく数人の女子は「素敵。」とこぼし目を輝かせてから入部

届けを入手すべく職員室へと駆け出すのだった。

第十二話『鉄拳』

「あ、ゴメン義美、ちょっとこの女子トイレでまって。さすがにここまで変態は来ないと思うから。ごめんこいつと話があつて。」

「あの、すこし、あ、どういうわけですか、ま、明巳がいうなら入っていないこともないのですけれど。」

「ウン、すぐに済むからチョットだけお願い。」

「わかりました。」

おとなしく義美はトイレに入ってしまった。ソレを確認してからすぐさま明巳は階段下のスペースへ圭吾を引きずり込む。

「まず、何か言いたいことはある？聞いてあげるから。」

「あ、あはは。そんなに怒らないでよ明巳ちゃん。」

「怒るわよ!」

ゆらりと背後にやたらマッチョな般若のス・ンドを発現させながら自分の胸の前に拳をあげる明巳。

ビィキィ、なんてその甲に血管が浮かぶ。

「伸を裏切ったいきさつを説明しないならもつとね!」

「裏切ったなんて、勘違いだよ明巳ちゃん。僕は最愛なる愛生先輩に、伸ちゃんが大スクープを巻き起こしますよって教えただけでばぎっ」

明巳の会心の右フックが圭吾の左頬を抉る。

「痛いなあ。もう、いくら明巳ちゃんとは長いからってそりやないよ。」

「黙れ！私は、あんたが、なぜ、伸の信頼を、裏切ったのかって、聞いているのよ。それ以外は、一切、聞く耳なんて、もっていないのよ。」

鼻血を流し拳大に赤く腫れ上がっている頬をさすりながら、依然微笑を絶やさずに圭吾は続ける。

「最後まで聞いてよ。僕はね……」

しばらくの静寂。

その後、メゴツなんて音が特別棟の階段に螺旋状に響き渡った。

「ゴメンお待たせ義美、今日は危なそうだから、そろそろ、かえろつか。」

「ええ、ええ。もうお話は済んだのですか？」

「ん、まあね。」

「……それなら、いいのですが。」

明巳と義美は肩をならべて歩き出す。そして、しばらく。

這い出すようによろよると圭吾は階段下から右頬を押さえて出てきた。

左右の頬を拳大に腫れさせている様は、童話の瘤取り爺さんのオチに出てくる悪いおじいさんのようだ。

「いはいなあ。すなほにせつめひ、ひはんだから、何も殴らなくてひひとおほうんだけど…」

階段の手すりに寄りかかって、廊下の角を曲がろうとしている小さい二人の背中を見やったとき、かすかに背にする手すりから振動が伝わってきた。

「あれ？」

振り向くと、そこには同じ新聞部員である真鱈目雅明。しかし彼はというと面倒そうというか、露骨に拒絶をするようにというか、その眉根をひそめて圭吾を見下ろしている。

「あ、真鱈目雅明君！挨拶遅れちゃったけど、僕は桜庭圭吾。同じ新聞部としてこれからよろしくねえ。」

「僕の名前を知っているなら自己紹介は必要ないだろ。それと、別に同じ部だからって馴れ合うつもりはないから。」

「あははは、手厳しいなあ」

「邪魔だからどいてくれないか？」

手すりに左手を添えたまま階段を下りてきた真鱈目は自分から道を譲るのが気に入らないらしく、手すりに寄りかかる圭吾を睨みつける。

「あ、うん。」

圭吾は素直に道をあけて、にこりと笑いながらそんな真鱈目を見つめた。

「雅明君、でいいかな。雅明君は…」

「真鱈目。」

「あ、うん。真鱈目君は何でこんなところに？」

「別に、小日向高校生が高校内のどこにいても問題はないだろ。」

「いや、ほら。真鱈目君はこの騒ぎにあまりかわりたくなさそうだったのに、ちゃんと二人のことを警護してるんだなあって。」

「どういう意味で言っているんだ？ソレは。」

振り向きながら、圭吾を見やる真鱈目の目は、その切れ長のせいもあり鋭く睨みをきかせているように見える。

「やっぱり、真鱈目君も愛生先輩のことを尊敬しているのかなあつて。」

目をキラツキラ輝かせて、圭吾は空を仰いだ。ソレを見やり、さして興味もなさそうに、ふうん。と唸ってから。

「別に。厄介ごとをとつと終わらせたいだけだ。」

新しいおもちゃを手に入れた子供が、古ぼけて飽きた昔の玩具を見るような目で最後の一瞥をくれて、真鱈目はきびすを返した。

「あ、じゃあ、また後でねえ。」

そんな背中に圭吾は手を振って、そして再び一年九組へと戻った。そしてすぐさま伝令役をならべる。

「え〜つと。伝令役の皆さん、重要な話をします。まず、多少強引でいいから大澤義美さんの住所を洗い出してくださいな。」

「それなら小日向市向日葵八四五・五番です！〜」

伝令達は示し合わせたように声を合わせ、みなで即答した。

「あ、あはは〜、有名なんだねえ。大澤さんの住所……」

う〜ん、それじゃあ、と圭吾は言葉を区切る。

「すぐに、その住所までの帰宅ルート进行分析、そして何か起こりそうな人通りの少ない場所を選別、それとルート近辺で、この地区特有の旧型民家、大屋敷、特に蔵なんかがある家に暮らしている一人暮らしの小日向学生の割り出しをお願いねえ。」

「『はいつ』『』」

圭吾は、一斉に強歩で各々の部に伝達に向かおうとする伝令の一つ、オセロ部の伝令だけを呼び止める。

「ええと、次の条件を満たすオセロ部員を一人、ここに連れてきてくれるかなあ。まず、ダイダイクラブに所属していないこと。それで、次が運動部と、ライバルの部に貶された報復に燃えて現状に参加していること。これは極秘でお願いね。」

「はい！」

にこりと能面のような笑みを浮かべ、圭吾は窓から、伸が飛び降りた中庭を見つめる。

「さてと。後は、どうやって伸ちゃんを……」

第十三話『籠城』

ぜいつ、ぜいつ、ぜいつ、っはあっ！

「つつかしい。ずうえつつたいこの学校の連中頭おかしいいいい！！！」

息を切らせながら伸は走る。
今居るところは特別棟二階。

地学室を通り過ぎ、その隣の科学準備室に指しかかろうというとき、窓を突き破り屋上からの弓道部とアーチェリー部の狙撃の矢がダメ、絶対！！と描いてあるポスターの女の子の胸をキューピッドの如くずたずたに貫いた。

狙撃主は特別棟、一般棟の屋上を占拠している。

一般棟には生徒が居すぎて逃げ回ってもすぐつかまるし、かといって特別棟は格好の的。追手もいる。

「コ、殺す気かあ！！ふざけんなあ！」

窓際の石壁を背に隠れる。

中腰で五メートルほど移動したものの背後の渡り廊下からばたばたと追手の足音が迫ってくる。
これじゃ、逃げ切れない。

「くっそ！！たまるかぁ！つかまって殺されてたまるかってんだあ
あぁあぁ！」

一気に転がり出て、そのまま科学室に転がり込んですぐにドアを閉める。

ドンドンドンドンと乱暴なノックのような矢が突き立つ音が響き、遅れてきた死のリアリティに、体中、直下型地震みたいな震えが走る。

しかし息つく暇もなく教室中を、隠れる場所を作ったように荒らしまわってから、窓を開け放つ。

窓の外には落下防止用のメートルほどの足場がある。そこに降り立ち、背中を校舎外壁に擦り付けながらずるずると移動。

地学の教科担当は抜けていて有名な坂下雄三。

賭けではあったものの、案の定開いていた地学準備室の窓から中へ飛び込んだ。

これで、少しだけ時間を稼げるはず。

二つとなりの部屋からは大声と探し回る雑音が響いてきている。時間の問題ではあるけれど、まず現在の状況を考え直さなきゃならない。

パカリと携帯電話を開いた。少しためらってから、明巳へとコール。コール音が聞こえて七度。

プツリとコールは途絶えてしまった。

「コレ………どういうことだ？なんかあったのか……？」

あああああゝと唸り、頭を抱え込む。

「なんにしてもコレじゃどうしようもねー。手持ちのカードが少なすぎる！」

つぶやいたとき、廊下に人の気配。

「オイ、今ここから声が聞こえたぞ？」

「どれ？……鍵が閉まってる。ホントに聞こえたのかよ？」

「マジだつて。唸り声がしてからなんかぼそぼそ言ってた。」

「おい、ファンクラブのやつ集めて来い。俺はすぐに鍵をもらってくる。」

「わ、わかった。」

——やべええええつばれたああつ

こそこそと今更気配を消して、逃げ出そうと窓に手をかける。しかし。

「オイ、もしかしてこの足場を使って別の部屋に逃げたんじゃねえ？」

「ありえるかもしれねえな。ここの窓一つだけ鍵が開きっぱなしだったし。もしそうだとすれば地学準備室あたりか？」

「いってみるか……」

かすかに開いた窓から、さっきの科学室搜索隊の声が流れ込んできた。

悟られる前に即窓を閉める。

——袋のねずみだとお！？

あああっバカバカバカバカ俺のバカ。

どうしようどうしようどうしようどうしよう。

ぐるぐるぐるぐる、自分の尻尾を追いかける犬みたいにその場で回る伸。

とにかく隠れる場所を探さなきゃならない。

「掃除用具ロッカー……はありきたりすぎるし逃げ場がない。」

視線をめぐるしくめぐらせる。

「机の下……なんて丸見えだし。まして……」

「おい、カギ持って来たぞ。」

「よし。じゃあ行くぞ。」

ガチャガチャ。

きたッ！隠れる場所、隠れる場所は……そうだ！ここだあっ！

ガラリ。

「年貢の納め時だなストーカートッ！！」

ばたばたと無数の足音が聞こえてくる。最低でも七、八人はいそうな気配がする。

そして伸は。

天井に吊り下げるタイプの超大型世界地図（巻物の要領の型）を天井に吊るし、引き降ろしてその後ろで壁にスパイダーボウイ（西映発）よろしく壁に手を突っ張って足を浮かせていた。

俺のバカアアアッなんでこんなところ……絶対に不自然だし何よりキツツイしょおっ！！

「むう、いないぞ。窓から逃げたのか？」

「ソレはないはずだ。鍵が内側からかかっているからな。」

「じゃあ掃除ロッカーの中……」

バンッ！！

「——には居ないな」

あの声は数学教師の田村久雄？なんでオカシナ暴徒に混じって教師までっ！

「田村教諭、見渡してみたものの机の下にも居ないであります。」

「そうか。じゃあもう隠れられるような場所はこれといって……」

そうそうそうそうすとも。そのままオカシイついでにこの隠れ場所に気付かないで帰ってくれ！

「そうですねえ。」

「この、不自然に降りている地図の裏側くらいしかないか。」

チツツツツクショオオオなんでこんなときばかりい！

終幕の足音が近付いてくる。

思えば短い人生だった。

キラキラキラリンと光に満ちながらダイジエストで今までの人生がちらほら。

ざわざわと、ご開帳の瞬間に準備しながら腕をパキポキ慣らしているのが聞こえてくる。

ああ、つかまったらセメテ、優しく尋問して欲しい……そしてミス小日向保険医に優しく介抱して欲しい。

締めムード全開で、ちらりと窓の外を見やった。

本当に、嘘みたいに澄んだ蒼い空。

海の青さをそのままウィンググラスに注いだみたいに綺麗で、最後に見るものとしたら上等かもし……

ジャアッ!! ガチン!

地図が上がる音で体が震えた。恐る恐る赤い顔の悪魔たちへと目を向ける。

「……………これは。」

田村久雄が、腕を組みながら無精ひげを撫で回している。

まるで、ホンシヨクの人みたいにどすが利いた顔でこっちを凝視。シロウトには手を出しちゃいけませんよ、と諭したくなる。

「あ、あははは。どうも皆さんお元気で……」

かすかに残った悪あがきとばかりに笑って見せる伸。しかし、歪んでいて何か歯を食いしばって耐えているようにしか見えない。

すっと、観念して震える手を壁から離し、地面に降り立つ。

「いつ……………!」

「ほら、『居たぞー』とか叫ぶと頭が茹った暴徒が来ちゃうから、出来れば、おとなしくつかまるから優しく連行して欲しかったり…

…」

「居ないぞ！！？誰だここにストーカーが居るって言ったやつは。」

「……………は？」

「い、いや。確かに声がしたんですって。だから調べてみようって……」

「問答無用！無駄な時間を使わせおつて！天罰觀面鉄拳制裁！！」

「ぎゃあああああ……………おふくろおお……………」

どさりと哀れな男が倒れこんだ。

——お、恐ろしい……………。運よくインビジ・ブルー発動してくれたようだから解ける前に逃げよう。

そろりそろりと、尚気配を消して。

抜き足一歩、差し足一歩と準備室を後にしようとしたとき。

ピロリイリイリイリイリロン♪

おおジーザス。我が制服のポケットで鳴り響いているのは明巳からの折り返しのコール音ではないですか。

『……………ですか。』

「あ、わわわわわっもしもし？今はマズイって…落ち着いたらまた

……」

『こんな薄暗い蔵で……』

「もしもし？蔵って何だ？明巳じゃないのか？もしもし！！？」

『ん？何だこの声…携帯か。……へえ。何かの映画であつたよね。そついうのムカつくんだよ！』

『きゃ……』

「へ？オイ、この男の声一体ダレの……」

ブツ、ツーツー……

「おいっ！明巳！どうしたんだ？何かあつたのか！！？もしもし！！！！？」

伸が現状も忘れて繋がっていない携帯に大声を張り上げたとき。

「……ン…？ああっ！ストーカーがこんなところに居やがったぜ！」

「は？」

バシバシとぶつかってくる殺気。

あれえ？インビジ・ブルーが発動してたはずじゃ…

「にやろうつ、余裕ぶっこいて電話しているだと！」

「沽券にかかわる。ここまでコケにされるとダイダイクラブの沽券

にかかわる！」

「あ、あはははは…はっ…どうも。じゃ。」

一瞬だけタイミングを計ったらずぐさま駆け出した。廊下に飛び出すなり、中断していた弓矢攻撃が降り注ぐ。

「くっそおおっ！まだ完璧に発動したわけじゃなかった、のっ、かつ、よおおお！」

三本、致命傷になりそうな矢を声を詰まらせながらくぐり、飛び越え、体を捻ってかわした。

せめてもの救いは、大勢が追いかけてくるものの流れ矢のおかげで追手がそれほど強烈じゃないことだ。

一瞬振り返ってから、差し迫った階段を一気に上る。

嫌な予感がする。

携帯のあの声は一体ダレだったのか。もしかしたら、ストーカーに捕まったんじゃないのか。

「いや、明日に限って、そんなことあるわけ…」

嫌な予感がする。

あるわけがないって、断言できない何かが胸に浮かんでは消える。

三階に駆け上がり、特別棟の廊下を駆け出した。

少しだけ弓や攻撃が激化してきた。屋上から対岸の棟の廊下を狙い撃ちしているのだから、当然階が屋上に近いほど弓では狙いやすいのだろう。

逃げるのだつたら一階に向かうべきだ。でも、インビジ・ブルーを発動するまえに行ったなら絶対に包囲網を突破しきれないだろう。

とにかく、一瞬とはいえ自分の馬鹿さ加減に存在感が薄くなってくれたんだから、あと少しだけ静かにできるところに隠れて、ノンシユガーでハードにビターなマイメモリーを掘り起こしてどつぷりとつかる時間が無くちゃならない。

ただし、コレだけ屋上からマークされてるんだからもう隠れるのは無理だ。

「ああ〜こうなったら手段なんて選んでられつかよ！…後で請求されないことを信じて。」

祈るようにつぶやいて、すぐ目の前に迫った書道室に転がり込む。

そしてすぐさま内側から鍵を閉め、手当たり次第に机を積み上げ、掃除用具のモップと箒をドアの隙間に捻じ込んでつつかえ棒にする。

下手に入ってくるとテレビが倒れるように仕込んで、それをならべた椅子で押さえ込む。

そう、最終手段。籠城でブルーデステイニィー作戦だ。

「ええ〜と。裁縫の時間親指の爪の間に待ち針をスップリ突き刺した。ダチがスカートをめくったとかで、なぜか俺が女子たちにひっ

ばたかれた。誰にでもなつく犬が、なぜか俺にだけ牙を剥いて手首をねらって噛み付いてきた。純粹だったあの頃、信賴して親父に預けたお年玉のすべてが釣具になっていた。地面から突き出た釘が靴を貫通して、痛みをこらえてすぐに引っこ抜いて足の裏を確認した。なぜか足の裏に穴があいていなかった。人体の神秘……」

バンバンバンバンッ！

「もう逃げられないぞストーカー！観念してでてこい！」

ガタガタ、ピシ、ガタガタガタッ！！

「何かが引つ掛かつてるぞ？」

「体当たりをかますか？」

「おうっ！みんないくぞおおっ！よぉーいしよー！」

どーん！

「よぉーいしよー！！」

どおーん！！

「ああああああっ！早く！真冬になけなしのお金でホットココアをかつたら、トマトジュース（温）が出てきた！その後三回連続で穴あきのジュースが出てきて未だ返金されず！友達になった女の子にもらったシュークリームが実は賞味期限切れで酸っぱかった！以降シュークリームは大嫌い！松矢で牛丼を頼んだら一時間待たされた！ついでに仲間は失笑して先に映画へ！合コンであぶれる俺の両隣

は男ばかり。まだかあつ！ううう、コレならどうだ！必死になって過去の悲しい話を今掘り返してる！そんな今の俺の悲しさッ！」

自分のあまりの不幸さに頭を抱えてごろごろと悶絶しているもの、なぜかまだ一線を越えられない。

「ぬうおおおおおつ！こんなところで、こんなところでええっ本物のストーカー扱いされてええッ！つかまるわけには行かないってのにいいまだ青春らしい青春も迎えてないってえのにい！！くそおおおおああああああつ！！！」

「よおついしよー！！！」

どおーん！！！！メギメギピシッ！

「あと少しだ！みんな命を大事に！心を一つに！！！」

どおーん！！！！！！

キュオオオオオオン……

不意に、校内放送のスピーカーから強烈なハウリングが漏れた。

第十四話『一步』

廊下まで響き渡るソレにより、ドアをぶちやぶらんとしている暴徒たちも思わず耳を塞ぎ、そして耳を傾ける。

『えええと。……あれ？愛生先輩、これってもう？……入っちゃってるんですか？』

『無論、もう全校に垂れ流したとも。』

『はっ、すいません！皆さん失礼しました。』

「この声は圭吾！？」

『はい！伸ちゃん聞こえてる？圭吾だよ！』

「なにやってんだよ……」

と、つぶやいて今更忘れようと切り捨てていたことを思い出す。

ついさっきの放送で、文化部を総括して俺を捕まえる総司令に任命されたのが圭吾だったってことを。

『ごめんねえ、伸ちゃん。僕、愛生先輩側につくことにしたんだ。理由は前言ったとおり。だから、あの時絶妙なタイミングで愛生先輩が乱入したのは僕のリークのせいなんだ。ってことで、告白する情報を渡して無事新聞部に入部できたから。ありがとねえ。バイバイ』

『ふふふ。桜庭君は優秀だよ。青崎くん。』

『ああ、それとね。伸ちゃん。僕は一階、一年生用玄関で愛生先輩と一緒にいるんだ。じゃあ抵抗して怪我しないようにね。』

プツリ。

ソレは放送が切れる音だったのか。伸の精神を保っていた何かが一線を越えた音だったのか。

バアギィガゴガゴカシャアアアアン！！
ぼんっ！！

ドアが悲鳴を上げて折れた。

押さえつけていた椅子は勢い余って弾けとび、ずしりと重石になっていたテレビはその場でたおれ、しゅうしゅうと煙を吐いて一瞬だけスパークした。

「全体突撃——！！」

どやどやと教室内にファンクラブの男たちがなだれ込む。手には皆が皆いつの間にか文鎮を装備。

頭の隅で、某人気ゾンビゲームの最新作の化け物町民みたいだな、なんて思う。

「どこだストーカー——！！」

男たちはそれこそ教室のあり一匹にがさんと再びロッカーの中、机

の下、引き出しの中、ゴミ箱。

およそ人間がおさまりそうもない場所に至るまで入念に搜索を開始した。

——教室の中心で、ぼんやりと立ち尽くす伸にまったく気付く事無く。

もう、いいか。

ストーカーとして名乗り出て、やりもしないコトを咎められて、まして見たこともない奴らにこんな血走った目で追い詰められて。

もう、全部嫌になった。

それでも必死にやってみたって言うのに、追い討ちのように親友だと思っていた圭吾にはいともあっさりと裏切られて。

馬鹿みたいだ。

周囲には必死になって俺を探している連中が居る。

すぐそばに居るのに、俺だけ違う場所に居るようにダレも気がつきやしない。

そうだ。

ここは、誰も気づけない場所。

オオサワサンに気に入られたい、なんていう、ここにいる連中と同じ理由で自ら踏み込んだ、俺がいるべきじゃない鏡の向こう側のセカイなんだから。

圭吾に裏切られた怒りは沸点を通り越してむしろ俺の頭をいてつかせた。

だからこそ、インビジ・ブルーが発動したんだろう。

今こそ逃げるチャンス。ココそが攻めに転じるチャンス。でも……。

耳元の喧騒が遠い。

いつそのこと、連中が俺を見つけて責め立ててくれたほうがよっぽど楽だって言うのに、もう誰も俺に気付くことはできない。

もういい。

もういい。

もういい。

もういい。

俺はもう、ここから動かない。

動く気なんてサラサラない。

大体、なんでこんなバカなコト……

ドンッ

肩に走った衝撃に驚いて振り向いた。それは、偶然ファンクラブの一人がぶつかっただけのもの。

「あ……。」

伸は思わず肩を抑えた。
ふと、思い出したことがある。

「どこにも居ねえじゃん。また窓からどっかに逃げたんじゃねえ？」
能力が最終局までいつているのだろう。伸の存在に気付けないどころか、そのフアンクラブの男は伸にぶつかったという己の感覚にまで気付けない。

こんなバカなコト。

——あいつが考えたんだ。

なぜやろうと思ったのか。

——あいつが背中を押したんだ。

そうだった。

——じゃあ、決めたのは誰だ。

失意のどん底のまま、かすかに、伸は上に手を伸ばした。
立ち直るなんて出来ていない。

だから誰も俺のことになんて気付けない。
でも。

だからこそ今、俺は動かなきゃならない。

道を作ったのも進めといったのも明巳の言葉だけれど、その道に――

歩踏み出したのはまごうことなく俺の決意だったんだから。

それに巻き込まれてしまったのは明巳のほうなんだから。

——さっきの電話は、明巳に何かあったのかもしれない。

だから俺は最後まで行かなきゃならないんだから。

呆然と立ち尽くしていた足に意思を込める。

朽ちて倒れる古巨木みたいにゆっくりと一歩、足は前へ。

それは、酷く力のない一歩だった。

それは、酷く消極的な決意表明だった。

しかし。

それこそが、失意のどん底の伸には革新的な変化だった。

明巳たちがいるとしたらもう校内じゃないはずだ。

どさくさに紛れてちよっかいを出すファンを遠ざけるために、タイミングをみて帰るって言っていたのを覚えてる。

向かうのは一階の玄関。

足を止めようとするメンタルを押し切って、伸は一歩、また一歩と足を踏み出した。

第十五話『ウソツキの笑顔』

「あ、愛生先輩ありがとうございました。コレはお返しします。」

圭吾は借り受けていた黒く、重く、無骨なトランシーバーのような機械をにこりと笑って差し出した。

「ああ。別に何ということもないんだが。」

カメレオンの舌が獲物を捕らえて戻るようにすばやく、袖の中にその機械は吸い込まれた。

「さっきの放送、桜庭君は青崎くんがここにたどり着けると踏んでいるのかな？」

腕を組んで、壁に背を持たれかけさせている愛生は顎を引いたままちらりと上目遣いで圭吾を見つめる。その色はやや、冷たい。

「ああっ！愛生先輩、僕を呼ぶときは桜庭と呼び捨てにするか、圭吾と呼んでください！」

懇願する小動物のように目を潤ませる圭吾に、愛生は一つため息を吐いて。

「桜庭。どうなんだい？」

事務的に一つ。しかし圭吾は花が咲いたようにうれしそうに微笑んだ。

「あははは、普通は無理だとは思っんですけど…」

「けど？」

「ああ、僕が何もないのに急に倒れたら、即僕が居た位置を撮影してくださいね。」

「ふうむ。それはどういふ……」

急に、パントマイムのプロがハンマーで横殴りに弾かれた様を演じたように。

愛生と相向かいで壁にもたれていた圭吾の顔が弾け、勢いのまま玄関に倒れこんだ。

パシャリ。

半ば反射のように手に持つポラロイドのフラッシュを焚く愛生。

自動小銃の廃薬莖が転がるのと同義の、ジーという音が玄関に鳴り響き、吐き出された一枚の写真は次第に鮮やかにすべてを映し出した。

「なるほど、なるほどそういうわけか。不思議な話だが…納得だよ。それに、信じられない話というわけでもないかな。」

大きくかぶりを振ってから、まるで鉞を振り下ろすように拳を振るったのだろつ。

投球後のピッチャーのようなモーションで、そこに居ないはずの青

崎が確かに写真に収められていた。

「そして、認識できたことにより私にも分かるようになる、か。いや、恐らくはキミが未だに、スクープを抱えているから、だろうね。」

「イタタタタ…明巳ちゃんに殴られた後だからホントに堪えるなあ。」

左頬をさすりながら、靴箱に背を押し付けてやっと立ち上がる圭吾。
「どこにいるの？伸ちゃん。うすうす思っていたけどやっぱり透明になれるんだねえ。」

痛みで歪んだ笑みを浮かべながら、圭吾はきよろきよろとあたりを見渡した。

「桜庭。『青崎クンは君の正面で、もう一発見舞おうとしているよ。』」

伸は振り上げた拳をぴたりと止め、その言葉を放った先輩へ、未だ壁にもたれている祇園愛生へ視線を向ける。

「俺のこと、見えるんですか？」
「いや、まったく。」

ただ。と愛生は晒う。

見えず。聞こえず。触れても気付かぬ筈の伸の言葉を理解して。

「キミのそれと同じようなチカラなんだろうね。私がスクープを探り当てる勘というヤツは。どうやら、キミは桜庭が言った以上のスクープを抱えているようだ。それならば、たとえキミが『知覚不可能』になつていようと、その姿を『直感的に認識』できる。」

「す、すごいなあ。本当に愛生先輩は。目の前に居るって言われても僕には見えないや。」

そついう圭吾の視線は真っ直ぐに伸がいるであろう正面に向いた。

「伸ちゃん。満足がいくまで僕を殴ったら、話を、聞いてくれるかな。」

逆に信じられないほど、いつもどおりに。

正面に怒り狂っているであろう伸がいてと分かつていて。

尚且つ、一体どんなタイミングでどんな風に何度殴られるのかも分からない状況で。

いつもどおりに圭吾は微笑んだ。

「もう、いいや。早くいかなきゃならねえし、な。」

毒を抜かれてしまったというのだろうか、もう、こいつを殴る気にはなれなかった。

「桜庭、もういいそудよ、彼は。君の『話』というヤツには、私も多分に興味があるね。どうやら、私も君に喰われていた様だ。」

「あははは、やだなあ愛生先輩。何を言っているんですかあ」

「いらねえ。聞く気もねえ。」

顔を赤らめている圭吾をすり抜け、伸は自分のくつを取りに進む。

「はいはい、ちょっと待ちなさいよ、青崎クン。私の言い分はこうだ。見えないのだと認識したのなら、君を捕まえるべく取る方法が変わるだけだ、とね。そして明日の新聞の一面は捕まえた君の記事で埋まることになる。ただね、ここまできたらそれは本意なんだよ。私は自分で納得できないものを記事に仕上げることなど真っ平ゴメンでね。」

「知るかよ」

伸はつかつけるようにくつに履き替えて、玄関のドアに手をかける。

「え？あれ、伸ちゃん。ダメだよ僕の話聞いてくれなくちゃ。そのまま行ったら明美ちゃん達を助けられないよ。」

「なに？」

「おや？」

「僕はね、伸ちゃん。僕のために、そして僕が役に立ってあげたい人のために最もスマートな選択をしたつもりなんだよ。」

寄りかかっていた靴箱から数歩前に踏み出す圭吾。

さっき明巳に殴られた右頬をさすって。

「僕が文化部を総括指揮したのは本物のストーカーを確実に割り出すため。明巳ちゃんの考え通りにコトが進んでも、もし本物が出てこなかったなら伸ちゃんが不利になるからね。」

「なんだって？それじゃ……」

「ははははは！なるほどね。そうかそうか。ジョウホウと人手が必要だった。だから桜庭は親友を裏切って新聞部に入部したってことか！」

「愛生先輩勘違いしないでくださいよお。だからって、愛生先輩の役に立ちたいって気持ちは本当なんですからねー！」

「大丈夫だよ桜庭。だからって君を追いつもりはないし、確かに私は君に喰われていたらしいんだからね。これは一本とられたな。」

「やれやれ、私もまだまだと、あいまいな笑みを浮かべた愛生は肩をすくめて見せる。」

「よかったあ。それでね、伸ちゃん。僕は今までのストーカー被害の時間、場所、天気、その時の詳細な状況、そして今日の帰り道におけるストーカーの強攻策の可能性をすべてひっくるめて。それとさつき、文化部員一人を使いに出して確認したよ。明巳ちゃんと大澤さんはまだ家に着いていないって。もうとっくに着いていてもいいのね。」

「それで？桜庭。」

「強硬手段に出たんだろうねえ。ストーカーは。探りを入れたとお

り、そんなことが出来て尚且つ、女の子とはいえ二人も隠せる大きな家を大澤さんの帰宅ルート上に持っている一人暮らしの学生は、たった一人だけ。」

「哇……」

「良かった。伸ちゃんが見えるようになったよ。それに、まだ圭吾って呼んでくれるんだね。」

「は？」

目を真ん丸くしてから。思い出したように伸は小さく笑った。

—そうか。

裏切られていたわけじゃないってわかったから、インビジ・ブルーが解けたのか。

「ふうふうふうふうふうふうふう」

仁王立ちから上半身だけ直角にお辞儀したような格好で、長く長く息を吐く。

肺の中を空っぽにしたら、小首をかしげている圭吾に歩み寄った。

軽く、左手を握る。

そして、その左拳を圭吾の右頬に捻じ込んだ。

「まぎやあああつ！」

ボールが跳ねるようにあつさりと吹っ飛ぶ圭吾。たつぷりと目に涙をためて、崩れた体勢のまま振り向いた。

「伸ちゃん、ひどいよ、ひどすぎるよぉっ」

「これで、全部水に流したってコトで。」

「両頬殴られるのは今日が初、なのに本日二度目だよ……。」

よよよよ、と泣き崩れるようなしぐさをしてからさっぱりと圭吾は立ち上がった。

制服についた埃をパンパンと払う。

「インパクトの瞬間に首を回して衝撃を減らしやがったな？」

「ふふふふ、まだまだ甘いね伸ちゃん。明巳ちゃんのと比べたらツルツとスッピンだよ！」

「あ……『月とすっぽん』、な。意味わかんねえよそれ。」

「湯上り卵肌的な？」

「ボケ倒しか！」

二人のやり取りを見つめ、いつの間にかとり落としたごく些細なものを思い出したようにゆっくりと目を瞑ると、愛生は自らの武器である一眼レフカメラから弾丸フィルムを抜き取り、中身を引きずり出した。

「あ、愛生先輩？一体何を……」

「なあに。気の紛れという奴さ。」

愛生は口の端だけきゅっと、小さく微笑んでみせる。

どこか悪戯っぽいその微笑みは、いつものクールなイメージとのギャップもあって、とても、可愛い。

伸と圭吾は、一瞬だけ顔を見合わせてから思わず数秒間見とれてしまった。

「私も、人間だからね。偶には、野暮なスクープなどよりも大事にしたいものもあるさ。」

どこか、自嘲的に感じる口調でそういい、再び愛生は肩をすくめた。そして例の黒いトランシーバーのようなものを取り出して放送をジャック。

『新聞部部長祇園愛生だ。校庭南よりの総合体育倉庫内に、青崎伸が逃げ込んだらしいという情報が入った。郊外に配置されている捕縛人員は総出で裏門周辺を固めるように。尚、屋上に配置の弓道・アーチェリー部は校庭側、特別棟の屋上に配置を変更のこと。以上。』

「ふう。これで、今の青崎クンでも正門からたやすく出れるだろう。早く行ったほうがいい。今の放送を聞いて校内組も功を焦って玄関へ押し寄せるだろう。私はここで何も見ていない。でも、彼らはここでストーカーを見つけるかもしれないからね。」

「祇園先輩、ありがとうございます。」

「ふむ。気にしなくてかまわないよ。私は私がやりたいようにやるだけだからね。」

「うん。じゃあ、僕もここで。伸ちゃんこれをもってって。」

圭吾が伸に渡したのは手のひらにおさまるくらいの小さいメモ。そ

ここには圭吾が調べたことの主要な内容が書き込まれていた。

「サンキュ。圭吾」

「ん、気をつけてかつこよく頑張ってきてねえ。」

ひらひらと手を振る圭吾と、微笑を浮かべて頷く愛生の二人に軽く頭を下げるとすぐさま伸は駆け出した。

伸は一直線にメモにある、義美と明巳が帰っていった道を走っていた。

/

長いため息を吐いて、まるで学校の壁に溶け込もうとしているように祇園愛生は柱にもたれた。

「まいったな。してやられたよ。」

「そんなあ。してやられただなんて。」

「いや、違う。」

愛生は自分の秘密手帳を取り出してないように目を通した。

「すっかり失念していたんだよ。さっきの説明で当てはまる人物に心当たりはある。」

「……愛生先輩。」

「いや、気にすることはない。桜庭、新聞の編集作業は二人でやるには忙しいぞ。覚悟しておいたほうがいい……。さっきのは、それとは違って、ただ、な。」

「?」

歯切れの悪い愛生の様子に、小動物のように目を丸くして頭にクエスチョンマークを浮かべる圭吾。

彼をよそに、愛生はポケットの中に忍ばせてある、伸が写っている本物のフィルムに指を這わせた。

そして、思う。

本物のスコーカーである可能性が高い『真鱈目雅明』よりも、私の直感に引っ掛かったのはやはり青崎伸だったのだと。

つまり、まだ、このスクープには真犯人を捕まえるよりも大きな『先』があるということを。

目の前にはまだ一枚も撮影していないフィルムがワカメのように伸びきって転がっている。

「……しまったな。弾が、足りればいいんだけど。桜庭、一度部屋に戻るう。」

今更ながら失敗したと苦笑して、愛生は部屋へと足を向けた。

より大きなスクープを手に入れるための、部室内のなけなしの弾丸を補給するために。

第十六話『涙』

「思うんですけど、明巳、あなたが私に空手を教えてくれればいいんじゃないですか？」

くりくりした目を輝かせて、不意にそんな提案をした義美は胸の前でガッツポーズを作って見せる。そして、しゅ、しゅ、なんて拳を三度ほど前に。

「それじゃボクシングだよ。」

「私、明巳に教えてもらえるなら頑張れると思うんですよ。それに、さっきのストーカーみたいなのを自分でちぎっては投げ！ちぎっては投げ！血袋、蟻塚、素敵です」。私も明巳みたいになりたいですよ。」

まるで夢見る少女がダンスを踊るようなステップで商店街を縦断する道でくるりと回る義美。

しかし、口にする内容は少なからず血なまぐさい。

明巳はそんな義美に苦笑した。

「そんな危ないのダメに決まってるでしょ！」

「なあんでですかあ？明巳が教えてくれればきっと大丈夫ですよ」

ムーッと子供のようなむくれっ面。学校で義美はこんな表情をする

ことはない。

「なんでも。」

義美はやるときはやりすぎくらい過激にやっちゃう子だ。自分で切り開けると思うならば自分という未開の森をたった一人でもすべて更地にしてしまおうとする。

無邪気というか、肩に力を入れすぎというか。

一緒にいると私も頑張ろうとやる気が出る反面、それと同じくらい、自分は彼女にとって必要じゃないんじゃないかと思ってしまうときがある。

初めて声をかけたときも、

「自分で出来ますから結構ですよ。」

が、初めての返事だった。

それは単に彼女の照れ隠しと、無類の努力家であることに起因していると感じたのはそれから少したってからだったわけ。

まあ、正直な話、空手を教えたくない理由はいろいろお世話になりっぱなしだから一つくらい義美に頼られる特技があるのがうれしいからなんだけど。だって、すぐに私が必要ないくらいまで上達しちゃいそうだし。

「もー！じゃあ報酬としてチーズケーキ焼いてあげますから！」

「甘いもので折れるような決意なら最初から教えてあげてるって。」

「じゃあじゃあ、好物のビーストロガノフ作ってあげますから！」

「えううっ……だ、だめー！」

「じゃあ魔王と焼き鳥ー！」

「ま、魔王と焼き鳥！？なにそのへヴィな交渉材料！？！」

「伝説の焼酎です。それと焼き鳥のゴールデンペア。」

「義美い、私のことオッサン趣味だと思ってない？」

「……………そんなことないですよ。」

「よゝしゝみゝ、何かな今の間はあ。」

があつと明巳は義美に襲い掛かった。覆いかぶさるように押さえ、義美の頬をムニツと左右に引っ張る。

「うそでふう！嘘ですって。おじ様にプレゼントお！」

「外堀から埋めにかかってもダメエ！」

「明巳のけちです。」

ぷいと顔を背けて、義美はまたむくれっ面になった。

「そうよ、私は弩級のケチですよーだ。今頃気付いたの？」

「……………そんなことないですよ。」

「だから何なのよその間はあー！」

「さあ、なんなのでしょうね。」

かばんを盾にして、逃げるように義美は歩調を速めた。

それを笑いながら明巳はカバンをヴァイキングがもつ曲刀カトラスのように回し、追いかけまわす。

商店街を抜けて左折。三分ほど歩くと土手がある。

土手の下、色とりどりの名前も知らない小さな花が咲いている小道を、ミュージシャンやドラマの話などの他愛ない話をしながらいつものように歩く。

日が傾きかけている下校時間に吹く風は、春先より幾分おとなしくなった草木の薫りとかなり早めの初夏の薫りを同時に乗せている気がした。

「気持ちいいですね。」

風になびき、顔にかかりそうになる変則ツインテールを手で押さえ、義美は振り向く。

「明巳？どうかしたですか？」

急に真剣な顔になっていた明巳に、義美は肩をこわばらせた。

「私の横に並んだまま、普通にしていて。さつきからずっと私たちのことつけているような気配があるの。すぐその曲がり角を曲がって待ち伏せをするから、曲がったらすぐに私から少し離れて。」

「私も……」

「私の腕っ節を信じられない？義美。」

「女の子が腕っ節を誇っちゃダメですよ。」

さながら先生が生徒を指導するように片目を瞑って人差し指を振る義美。

そういわれちゃうとやり込められて明巳は苦笑いを返すしかない。

「痛いところくなあ。」

「……気をつけてくださいね。それとやっぱり、空手、教えてください。」

「うん。ダメ。」

「けち。」

「じゃあ、ご要望どおりに今日からケチを極めようかな？」

「それは困りますよ。」

ふふふ、あはは、なんて声を合わせて小さく笑いあい、そして角を右に曲がる。

曲がつて一メートルくらいの位置に明巳は構え、すぐさま正拳突きを出せるように細く長く息を吐き出した。

義美は皮製のかばんの取っ手を握り締め、三步離れた位置で不安を紛らわせるように胸に抱いた。

そして、明巳の長い長い吐息が切れた頃。曲がり角から一つの影が現れた。

「セイツ！」

「あ？ツツツグあ？！」

拳よ貫けといわんばかりの正拳突きは綺麗に曲がり角を曲がつてきた真鱈目の顔の中心にめりこんだ。首が跳ね上がり鼻から赤い線が空気に舞った。

「私たちを付回していたいどういづつもり！？クラスと名前を言いなさいよ！」

その場に、しりもちをついてぺたんと座り込む真鱈目。

「いってえ。いきなりなにするんだよ。ボケエ。」

「待ってあげてるんだからとつと私の質問に答えろって言うてんのよ。」

真鱈目がどう動こうと、起き上がるその一つの動きより先に二つの打撃を打ち込める迎撃体勢で明巳は容赦なく睨みつける。

「暴力女が。僕は家に帰ろうとしてただけだつーの。ほらよ。」

生徒手帳をぽんと前に投げ出す真鱈目。ちょうど住所が載っている欄が開かれている。

明巳はちらりと電柱にある番地と見比べて、すぐ目の前の古い家が書いてある住所であることを確認した。

改めて見渡せば、古びた蔵がある大きな家の門には、真鱈目という表札がかかっている。

「それは分かったけど、あんた何ですつと私たちの後を追っかけて

きたのよ。私たちは遠回りしてこの道を通ってきたのよ？あんたは町の大通りを通ってくればもっと早いじゃない。」

「うるせえな。僕だってこんなことしたかなかったんだよ。部長がトチ狂ったこと言い出したせいで、この馬鹿騒ぎに巻き込まれてそちの……大澤義美さんを護衛する羽目になったんだからよ。」

明巳は怪訝そうな顔でもう一度、生徒手帳の内容と真鱈日本人を見比べる。

「ああつ！あんた新聞部の真鱈目雅明！？」

「ボケエ。もつと早く気付けよ。殴られゾンじゃねーか。」

「ゴメン確認すればよかった、よ？」

目の前に真鱈目の手が伸びている。

「引っ張り起こせ。」

「はあ？なにいつてんの？」

「ああ、鼻イテエ。ボケにいきなり殴られたせいで足がぐぐくだしよお。」

無然と、超然と。いけしゃあしゃあそんなことをのたまう真鱈目。

「あつそ。」

酷く腹立たしい。しかし確かにいきなり殴りかかってしまったのは私が悪かったんだから、と、我慢してぞんざいに腕を引っ張った。

「そりゃ悪かったわね！」

「まあ、ゆるしてやらねえでもねえけどな。」

引き起こされた真鱈目は手を払いのけた。

その勢いのまま前のめりに明巳に体を倒し、そしてそのまま残った手で隠していたスタンガンで明巳に押し付け、スイッチを押した。

「なっぎっ!!」

「明巳ッ?!」

引きつった義美の声と共に空域がひび割れたみたいに乾ききった音がパシリと響いた。

びくりと毛の先から指の先まで震わせて、明巳は自分を操っているすべての糸を切り落とされたように前のめりに頭から倒れこむ。

「…なんへえ……?」

「だって、僕が本物だから? ははっ ははは」

「よ……ひ……みい……にえ……ぐッ!!!!」

麻痺し、回らない舌で逃げるように伝える途中のスタンガンの追い討ちでそのまま、明巳の意識は暗幕の奥底へと引いていった。

「インターハイ優勝経験者をまっこうから相手するわけねーじゃん。逃げる、だ? ム力つくんだよばあか。」

真鱈目は制服の汚れを払いながら、その足を上げ、明巳の腕の上へ。

「義美。君は逃げないよな。僕から、逃げないよな。」

頭の中の何かが抜け落ちてしまっているんじゃないかと戦慄するほど、色のない目でへらへらと笑う真鱈目。

こんな眼をしているこの男なら、容赦なく腕の一本を踏み砕くかもしれない。

「明巳に何かしたら、絶対に赦さないです。」

全力をもって敵意をぶつける。敵意をぶつけて人を倒せば、もっと早くから明巳に空手を教わっていれば、あの時私も明巳を護れる位置に居れば。いろいろなことが頭の中を駆け巡る。

「いいねえ。それもステキだ。ずっと、ぜったいに、赦さないで、僕のことを考えるんだろ？」

しかし、真鱈目の歪みには今の自分が出来る対抗手段がすべて通用しないと、たった一つの返答は痛いほど知らせてきた。

義美は強く拳を握り締め、下唇を強く噛む。かすかに、血の味がするほど。

「……………なんでも言うことを聞きますから、明巳を助けて。」

「じゃあ、僕が何を望むかは分かるだろ。」

「…はい。」

「とりあえず、コレを中に運ぶ手伝いしてくれよ。」

「何でも言うことを聞きます。でも、明巳のことを次にコレなんて呼んだら、明巳に何か危害を加えたら、刺しますよ。」

「あつははははは。義美にさすのは僕のほうさ」

——明巳。私……

「ごめんなさいです。明巳」

涙が出てきそうになった。胸の奥が、喉が、鼻の奥がきゅうつとわずく。

でも、一度強く目を瞑ってこらえきる。

泣いてしまったら、この男に負けてしまったことになってしまうんですから。

とにかく、意識を取り戻した明巳だけは逃げられるように。そのチャンスを待つために。今はとにかく耐えなきゃダメです。

明巳の足を抱える。真鱈目は乱暴に脇に腕を入れて持ち上げた。

「優しくしてください!」

「へえへえ。」

真鱈目はふらふらと体を揺らしながら、義美は細心の注意を払い。門をくぐりそして向かうのは蔵。

ピリリリリリリ。ピリリリリリリ。

そのとき急に明巳の携帯がなり始めた。

「うるせえなあ。」

真鱈目は手を伸ばしてそれを止め、その場に投げ捨てようとする。それを、手を伸ばしてキャッチ。

「やめてください。義美に関係するもの全部、手を出すのはやめて。」

「細かいねえ…。まあいいけど。」

義美は自分のポケットへとしのばせる。

ままならないまま、三人は蔵の中に足を踏み入れた。

重々しい扉を開き、そして口をあけたのは薄暗くほこりっぽい空間。

差し込む夕日で照らされた細かい粉塵のような埃が見える。

目が慣れてくると見えたのは並べ立てられた薬品の瓶。そして、現像された私の写真の山。無くなった私の私物。

どうやら、基本的にここは現像室として使われているらしい。そしてストーキングの成果の保存記念館でもあるようだ。

抱えている明巳の脚に少しでも力を入れていた。

明巳と一緒にいるときの写真を、日常を、こんな顔をしていたのかと自分でも驚くような表情を収めてある写真郡。

さながら壁が悪い病にかかっているように、年数を重ねたクリーム色を乱雑に侵食する爛れの様なさまざまな色。

ひどく、気持ちが悪くなる光景だ。

「ここに寝かして手足を縛るんだ。抜け出せるように緩くなんてしたらどうなるかは…。」

「わかってます！」

何度目になるのかわからない謝罪を心の中で明巳にしながら投げよ

こされた紐で手足を縛る。ちゃんと確認しているつもりなのか、片時も真鱈目は目をそらさない。

悔しそうに歯噛みをしてから出来るだけ優しく力を込めて縛り上げる。それを満足そうにみてから真鱈目はその縛りの堅さを確認し始めた。

——ここです！

ポケットに忍ばせた携帯電話。明巳についさつき電話をかけてきた誰かに、確認もせずに折り返しの電話を入れる。

「ふうん。もつと軽くやると思ったけどちゃんと縛ってあったか。」
「そんなことで満足ですか。」

あとは、相手が出てくれたらそれらしいことを言って場所を伝えるだけ。

「満足さ。俺が命令すれば君は親友であろうときつく縛り付けるんだ。こんなにうれしいことはない。さあ、次は君だ。手だけは後ろ手に縛るからな。」

「手を縛ったら私は逃げられません。それでもまだ明巳を解放してくれないんですか。」

「めんがわれてるからな。開放するにしてもすぐすぐじゃねーよ」

『あ、わわわわわっもしもし？今はマズイって…落ち着いたらまた……』

ポケットの中から相手の動揺した声が聞こえてきてしまった。
マズイです…ばれる前に今の居場所を……。

「こんな薄暗い蔵で……」

『もしもし？蔵って何だ？明巳じゃないのか？もしもし！！？』

明巳、いくらなんでも携帯の通話音量大きすぎですよ。これじゃあ…

真鱈目の視線が私のポケットに向いた。

ばれてしまったみたいですよ。

「ん？何だこの声…携帯か。……へえ。何かの映画であつたよね。そういうのム力つくんだよ！」

「きや……」

浪人が抜刀した時の動きみたいに大きい動作のビンタが義美の頬を叩く。義美がひるんだ隙に真鱈目は携帯を取りあげ、すぐさま通話を終了させた。

だめです。

この場所も、そしてこの男のこともぜんぜん伝えることが出来なかったです。もう助けを期待するのは絶望的。それに何よりまずいです。これじゃ明巳にまでこの男の暴力がいつてしまいます。

初めての、しびれるような熱を帯びた頬に手を当てて、なぜか冷静な思考をめぐらせながら再び泣きそうな表情で義美は真鱈目を見上げた。

怒りに我を忘れて、般若のような顔をしていると思ったら、見上げた真鱈目はからだをわなわなと震わせて眉をひそめているだけだった。

「なんで、僕の気持ちを理解しないんだ！」

ぜいぜいと呼吸は荒くなっていく。今にも倒れてしまうのではないかというくらい体を震わせている。

地面にへたり込んだまま、無意識に倒れている明巳のほうへずると避難する義美。

その、真鱈目の様は怒り狂われ地団太を踏まれるよりもよっぽど身の危険を感じさせるのだ。

「僕は君が大勢に追われるのを嫌っているのをくんでファンクラブなんて馬鹿なものに入っていないのに。」

よろけた体を支えるように真鱈目は現像に使っている机に手を突いた。

真鱈目は一言一言の間に異常なほど間をあける。まるでそうしないと何かが発火しそうなのをこらえているようだ。

さあつと冷え切った指でうなじから背骨を撫でられるような冷たい悪寒。恐怖が緩慢に、しかし確実に湧き上がる。

「僕はダレよりもキミの事を理解しているのに！」

ぎろりと、目をむいて真っ直ぐに真鱈目は義美を見つめる。

その瞳には陰鬱なクライ光が蛇になってとぐろを巻いている。

「なんでだ！なんで義美は僕のことを理解してくれない！！なんでみんな僕のことを理解してくれない！君は僕と同じだったじゃないか！！」

ずんずんと一気に義美に迫り、戦慄するその肩に乱暴に掴みかかる。

「ひう」

「何でそんな顔をするんだ！同じはずだろ！！僕と君は同じはずだ！君が信じるのは唯一つ。自分の足跡、自分で積み上げたはずの石

の山、自分で組み立てたロジックだけのはず！与えられた令嬢なんという立場じゃなくて、自分で選んで掴み取った何かだけのはず。そのためには足かせになる他人になんて興味はない。それが君だ！そして僕だ。」

「い、痛いっです！」

ぎりりと、双肩にめり込む指。

「同じじゃないか。義美を理解してやれるのは僕しか居ないじゃないか。こんなによしみのことを思ってるのに！なんだって君はあ！」

リンゴーン♪

蔵に走る埃まみれのコードが繋がるスピーカーから、玄関のインターフォンの中継の音が鳴り響く。

「うるさいっ！」

リンゴーン♪リンゴーン♪リンゴーン♪

「とつととかえれえ！」

リ・リ・リ・リ・リ・リ・リ・リ・リンゴ・リンゴ・リ・リ・リ・リンゴーン♪

「大事なときにしつこいぞ！」

真鱈目は床を一際強く殴りつける。痛かったのか、密かに赤くなつた拳をさすっている。

「手エ出せ。」

義美は震えながら素直に前に両手を差し出した。真鱈目はそれをあつという間に明巳を縛っているものと同じ紐で固く縛りつけた。

「大声出しても外には聞こえないからな。おとなしくまってるよ！」

リン・リ・リ・リ・リ・リン・リ・リンゴ・リンゴ・リ・リ・リンゴーン♪

「うるせええええ！」

壁を蹴り飛ばして、片足ケンケンしながら真鱈目は出て行った。

そして急に訪れた静寂に満たされた蔵の中で、明巳の呼吸音を聞きながら。

未だに痛む肩と苦しい胸に手を添えながら、義美は暴れまわる心臓をなだめるために視線を明巳へ。

無体な明巳を見るとさっきの真鱈目の言葉に反論できなかった自分に、嫌気が差した。

「……違いますです。」

ちがうです。

だって、私には、明巳が必要だから。まだ、多くの人と仲良くやるのはあまり得意じゃないですけど、でも私には。

体が粉になって、今にも崩れ去りそうな感覚に襲われた。

すっかり義美は萎縮してしまっていた。悪意に近いほど歪んだ誰かの思いをぶつけられたことなど今まで一度たりともなかったからだ。

相変わらず、明巳は気絶したまま。

明巳、もし、今、あなたが起きていたならあいつになんていったんですか。

明巳、もし、私が反論できなかったところを見たら、あなたはなんといったんですか。

「私には、必要です。自分以外の友人が必要です。私はあいつとは…違いますです。」

震えるかすかな声は、歪すぎるゆりかごの中で一瞬にして溶けて消え去ってしまった。

さつきとはうって変わった暴力的なまでの沈黙に、おびえるようにひざを抱えた義美の頬に一筋、光が伝った。

/

第十七話『閃き』

「でけえ家だなあ」

目を細めて伸は木製の仰々しい門を見上げた。

明らかにこの家は一つの家族が暮らすには不必要極まりない広さ、そして建物の趣向だともう。

だって言うのに、手の中にあるメモには一人暮らしだって書いてある。

ええい、コレで本当に真ストーカーだったならいろんな意味でゆるせん！

断じて許せん。

半ば八つ当たりでもう一度、ダダダダッなんてリズムを刻んで設置されたインターフォンのボタンを連打連打連打！

「誰もいないってのはないか？居留守かもしれないからとにかく…
コノコノコノコノ！！」

一秒間にインターフォン十七連射。やった名人を超えたんじゃないか俺。

「コオノコノコノコノコノ…」
「オイ。何やってんだ貴様。」
「コノ…え？」

なんだか連打することが快感になってきた頃、門の一部がかりと

開いて覗く半端無い勢いの睨みと呆れきったような断定口調が伸の
ブツンコノコノを遮った。

「あ、真鱈目雅明？」

「……………青崎伸か。」

「あゝ、冷静みたいで良かったー。ホントの話を聞いて欲しくて何とか学校を抜け出してきたんだ。少し落ち着いて話をしたいから門を開けてもらえないかな。」

ピピ、ピピピッ。

携帯を操作するような音が門の奥でしている。

マズイ携帯で兵隊を呼ぶ気満々だ、あいつ。こうなったら圭吾のメモにあった方法で不本意ながら中に入れてもらうしかない。

まずは…………

十七連射！

「…………おい、こら、迷惑防止条例違反でまず通報しようか？あ？」

「ああっそれだけは勘弁して！だって今ファンクラブの兵隊を呼ばうとしてたじゃん。そうなると俺、ストーカー呼ばわりされちゃってどうしようもなくなるんだよ。」

「…………ストーカー呼ばわりって、貴様がそうなんだろ。自分で言ってたじゃねーか。」

「違うんだよ。ホントは違うんだって。だから話を通じそうな総括指揮のあんたを探してきたんだ。ファンクラブの奴ら目が血走って、もう頭がアウストラロピテクスにまで退化してやがってさ。あんたはファンクラブ入ってないって放送で言ってたし……」

「信じる理由がない。何より貴様むかつく。」

ピピピ！

「ああっ！あんな女に好かれようとストーカーしてたなんて嘘つくんじゃないかったあ！」

頭を抱え込んで叫びまわる伸に向いている、取るに足らないものを見る目にかすかに灯がともった。どちらかといえば低く唸りながら青白く燃える灯が。

「どっついうことだ？」

真鱈目は品定めをするように目を細める。

伸は、内心しめたとほくそ笑む。

「ほら、あのコ顔が可愛くて好みだからさ。まあ、顔以外はもうもいいんだけど。あーゆー感じの性格は好かないし。それで今その筋ではストーカー被害にあってるって聞いたんだ。だからストーカーって名乗り出れば本物が出てくんじゃないかと思っただ。そいつとっ捕まえればファンクラブの連中と同じくでかいプラス印象だろ？あのコと付き合えれば箔がつくじゃん。俺にさ。」

——ああ、この間演劇部の助っ人やつててよかったあ。

思ってもない事をぺらぺらとのたまう伸。しかし完璧に役に入っている今の伸には嘘特有の動きは一切無い。

真鱈目のその目にと持っていたかすかな灯は轟々と猛る真っ赤な炎になっていく。

太陽のフレアのように、溜まりきった怒りを発散するため定期的に眼輪筋がピクンと痙攣している。

——確かにこいつ本物だ。巧妙に隠してるけれど可能性を分かっているやつが見ると十分尻尾が見える。

あと、一息。

「でもさ、聞いてくれよ。あんな女にあんなにたくさんファンがいると思わなくてさ。裏ルートで格安の物件かと思っただらとんでもないハズレ。もうあんなののために泥かぶるのなんて割に合わねえってわけでき。だから………」

勢い良く木製の門が開く。年季が入っているのだろう。体の芯まで滲み込んでくる、深いきしみ音が鳴り響いた。

「入れ。貴様はむかつく。でもその話はあながち嘘でもなさそうだから。」

かかった。

「さ、サンキュー！」

ステップを踏んで門の中へと踏み込む伸。そして再び拒絶するように門が閉まった。

よし。

仕掛けるのはすぐだ。

横で、話の続きはアッチでだと居間らしきほうを指差している真鱈目から数歩離れてから、周囲を見渡す。

電話で聞こえてきた単語は『蔵』。

平屋が広がっているこの屋敷の横をぐるりと回っていった先、平屋の屋根の上に蔵らしき部分の頭が見えている。

あとはトイレはどこだとか言ってその隙に……

「ガアッ!？」

全身をプレス機で全方向から押しつぶされたんだと思った。

瞬時に体が一直線に伸びたかと思うと下半身がなくなってしまったように伸は地面に倒れふす。

「クソヤロウが。テメエが義美を語るんじゃないやねえよ下衆。」

勢い良く真鱈目は伸の腹を蹴飛ばした。

「ッッ!」

痛みはない。感覚が麻痺している。でも反射的に反吐を吐いた。

しまった……油断した。これが明已たちが捕まっちまった理由。

「は、体うごかねえだろ。でも気絶はしない程度の威力にしといた。」

自慢げに自分の武器を小刻みに揺らして見せ付ける。クワガタをいい加減にロボットに改造したような角ばったそれは、あまりに陳腐でこっけいにも見えた。

真鱈目は後二発ほど伸を殴ってからずると伸を引っ張り、そしてさつきと同じく蔵へと移動する。

まるで羅生門だ。

さびが削げ落ちる音。蝶番の隙間の埃が摩り下ろされる音。

それらを響かせて火事に耐えうる厚く野暮ったい扉を開くと、禍々しい空気と今まで盗撮してきたのであるう写真が目に飛び込んでくる。

目が慣れると、奥のほうで小さく震えている大澤さんが見えた。スーカーのはずの俺の事を見ると、更に警戒を強めるように体をこわばらせる。

「はは、変態が……お前が本物じゃっつがっ！」

サッカーボールを蹴っているつもりなんだろうか。大きく足を引いて蹴り上げるトゥキックが鳩尾にめり込んだ。

「きやつ」

勢いあまって大澤さんの横まで転がった伸を、あざ笑い、そして踏みつける真鱈目。

「僕の愛を横取りしようとした拳句に、僕を前にしてあんなふざけたことを言っただ。ただで済むと思わないだろ？」

真鱈目は次第に踏みつける足に力を込めていく。

体はまだ動いてくれない。でも、段々と痛覚は戻ってきている。胸が割れるように、息をするたびに痛む。

肋骨にひびが入っているのかもしれない。

ちらりと視線を流すと、大澤さんの後ろには、彼女に庇われるように横たわっている明巳。

「……で、テメツ」

何とか体を曲げたとき。後ろから明巳の声が聞こえてきた。

「何が愛を伝えるためだって？ ばっかじゃないの。頭の中蛆でも湧いてるんじゃない？」

「ああ？」

「明巳！」

「え！？」

伸と義美の声が重なった。そして直後、明巳の名を呼んだ俺に驚き振り返る義美。

「ゴメン義美。伸とは幼馴染なんだ。黙ってて、ゴメン。」

「え？ どういうこと、です？ 明巳？」

ガンッ！

勢い良く撥ねたのは、今度は明巳の体のほうだった。

「明巳！」

口にこみ上げてくる鉄の味をかみ締めながら伸はせめて声を張り上げる。

「大丈夫。こんなへたくそな蹴り、私にはぜんぜん効かないからさ。だいたい、こんな愛を語って卑怯なコトするヤツにやられるわけ無いでしょ。」

「卑怯だつて！？！」

足を高々と上げ、一気に踏み降ろす。真っ直ぐに振り下ろされたそれは決るように明巳の腹にめり込んだ。

「つつつ！……ぜんっぜん効かない。素直に告白する勇氣も、そして伸みたいにあっけなく振られる覚悟も出来ないような臆病者の蹴りなんてっ！」

「おくびようだつてえええ！？」

振り下ろしの右拳が鈍い音を響かせる。

何だよ。あっけなくやられて、終いには明巳が殴り倒されてる様を見ているしか出来ないってのか？

なんだよ俺。

ここを何とかできなきゃ男引退だろ。

動けよ体！

痺れが、麻痺が一ヶ月くらい後遺症で残ってもいいから。だから今

だけ動いてくれよ！

動けよ！俺の体！

あのストーカーをぶちのめして明巳を助けられる力を……

力？

力ならある。

そうだ。

俺には、あいつをしとめられる力がある。

インビジ・ブルーを発動させると体の感覚は少しかだけ薄くなる。

そのくせリミッターが外れたみたいに少しかだけ力が強くなる。

だったら、インビジ・ブルーを発動させれば今の体でもあいつを倒せる。

たとえばからだ満足に動かなくても、こっちが透明なら明巳の前に転がり出てあいつの凶行を俺が肩代わりすることも。

どうすればいい。

どうすればインビジ・ブルーを発動できる。

どうする。

どうすればすぐにへこめるか。

正面の光景を見ると、募るのは怒りだけ。

真鱈目に対する怒りと、そして無力すぎる自分自身へのドロドロした怒りだけ。

ダメだ。これじゃあインビジ・ブルーどころじゃない。

ちくしょう。どうすりゃいいんだよ。

爪が食い込んで痛いくらい拳を握りこむ。

せめて立ち上がることが出来るくらいからだに戻ってくれば何とかなるけれど、今はそれすら出来ない状態だ。

「明巳……」

ふと、俺の後ろから女の子の声がした。

コレは聞きなれた声だ。

深い深い傷口がうずくような声。

そうか。

瞳孔が開く。肩から背中へ、ぞわりと閃きの電気が走る。

第十八話『二人』

最近、どういうときに俺はインビジ・ブルーを発動した？

そうだ。

俺、最近大澤さんに振られてインビジ・ブルーを発動したんだ。

簡単なことだ。

じゃあ、後ろにいる大澤義美さんにもう一度振られてへこめばいいんじゃないか。

名づけてブルーブルーキングオブレジェンド大作戦！！

星の数ほどいる人間たちの、いや、生物全般におけるオスのなかで恐らく唯一。

確固たる意思を持って伸は一年のアイドル、大澤義美に『手ひどく振られるために告白する』決意を固めた。

全力を費やして一度だけ半回転体を回す。

——それも生半可じゃ駄目だ。

伸は硬く目を瞑る。

事前に振られることが確定しているんだから、衝撃は半減してしま
うのは道理。

——ならば、どうするか。

ただ告白するだけじゃ、恐らく足りない。

——ならば、どう告白すればいいのか。

急に自分に向き直った仲を見つめ、先程真鱈目に掴みかかれたときみたいに義美はたじろぐ。

結論はこうだ。そう、酷くシンプル。

『末代まで語り継がれるような気障でくさくてどうしようもなく泥臭いありったけの言葉で告白する。』

ただ、それだけだ。

「大澤義美さん。急な話なんだけど、俺、本当に君のことが大好きだ！飯を食っていても、勉強しようとか机に向かってても、寝ても覚めても。そして一日の終わりに考えるのは決まって君のことだった。」

「え…いきなり…なんです？」

一瞬、わけが分からないと義美は目をむいた。

それも当たり前。こんな局面でこんなことを言うのは多分伸を置いてほかにいないだろう。

『ありったけの恥ずかしい言葉を、もっている語彙から引きずりだす。』

「おまえ、何を言って……」

真鱈目は急に後ろでおっぱじまった恥も外聞もない告白大博覧会を信じられないと目をむき振り向いた。

「あ、あは、ははは。伸め。……ばかだなあ。もっといいタイミングがある、でしょ。」

その足下では明巳が身をよじる。

痛みが原因じゃない涙を、ジワリと目じりに一滴浮かび上がらせながら。

「きつと俺は俺以外の誰かがいなきゃダメなんだ。大澤さんがいなきゃダメなんだ。大澤さんのことを知りたい。くだらない話を何時間も何日も何年もしていたい。」

『明日から、振られたら生きていけねえよってくらい恥ずかしげもなく言葉を紡いで。』

「誰かがいなきゃ………だめ？」

義美の瞳に、幽かに、そう、恐怖以外の感情がもつた。

「きっかけは一目惚れだけど。でも、この気持ちは本当なんだ。俺、いい男じゃないかもしれないけど、金持ちでもないけど、頭だってそんなにいいほうじゃないけど。でも俺が手を伸ばして届く以上のすべてを大澤さんにあげたいと思うから！俺が大事に抱えていたい何かを共有したいと思うから。だから………」

『そして、それを上乘せした衝撃で一気にインビジ・ブルーを発動

してやる。』

義美は、ぐったりとだらしく床に投げ出されている伸の腕を見つめた。

彼は、私と同じコトを大事にしたいと思っているんだ。

彼は、私が大声で言うことができないことをこうもたやすく叫べるほど強いんだ。

彼は、もう誰も助けに来てはくれないと絶望したこの蔵へ、一人で私たちを助けるために駆けつけてくれたんだ。

「ふざけるなよ！」

真鱈目は肩を震わせてゆっくりと伸たちへ迫ってくる。

最後の一言を、言わせまいと足を踏み出す真鱈目は、義美の変化に気付いていた。よもや、と思いつつ、しかし最後まで言わせてしまったときの義美の返事が、彼女が自分と同一だと思っているからこそ予測できてしまったのだ。

「だから、大澤さん！俺と付き合ってくれないか！？」

彼は、私たちを助けるためにこんなにぼろぼろになって。

明巳といい、彼といい。

私のために。

義美は眼をつぶり、体を丸めて縛られたままの手で肩を抱いた。

触ると、真鱈目の爪が食い込んだ肩はまだ痛んだ。

でも、あの時息も苦しくなるほど押しつぶされそうになっていた胸には、温かい何かが湧いてくる気がした。

「義美は！お前みたいなの！半端なヤツのことなんか！邪魔で仕方がないんだよ！お前みたいに箔付けで義美と付き合いたいだなんて言うまがい物なんかが近付いていいようなそこらへんの穢れた女じゃないんだよおお！！」

頭を踏み潰そうと真鱈目は勢い良く足を上げた。そして容赦なく、それが勢い良く振り下ろされたとき。

義美は縛られている手で勢い良く寝転がる伸を引き寄せた。

一般的な高校一年生よりもだいぶ発育している柔らかな双丘がふわっと伸の顔に押し付けられる。

「ほふあは？」

「なあっ！？」

「義美……」

義美は、伸を抱いていた。当然体が満足に動かない伸は柔らかい義美の胸へ体重のまま頭を預けている。

「初めてですよ。ここまで私に熱心に告白した人は。本当に、馬鹿みたいです。大声を出して。」

言葉というよりも吐息に近い小声で、伸の頭には義美の言葉が降ってきている。

「聞こえますか？私、今ときどきしてます。あなたがストーカーで

もいいです。私を好きになつてくれたからそういうことをしていたのなら、私もそれを飲み込みます。……うまく、付き合えるかは分からないですけど、私でいいって言つのなら、よろしくお願いします。伸さん。」

「え？オオサワサン？」

「義美と呼んでくださいです。」

「ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！」

うれしいけどうれしくない。

。うーん、うーん

てか、このままだと俺の僕自身が元氣満々になりそうな空気が。

いれもどいてみる。

いや、目的は完遂に近いんだけど、
 だけど、
 だけど、
 だけど。

ちらりと視線を後ろに流す。痙攣しているのではないかと心配したいほど体を震わせている真鱈目が見えた。

これ、やばくない？

インビジ・ブルー―絶対発動できない？

「……違う。」

真鱈目は俺の肩を掴むと勢い良く掴むと倒す要領で思いつきり引つ張った。

勢い良くスツ転がった伸は後頭部を床に強打！

「うんうんうんうん」

「違う！こいつはストーカー行為なんてしちゃいない。アレは全部俺がやったんだ！俺がやったことをこいつは全部横から自分がやったみたいに言っただけで！アレは愛を伝えるために全部俺が……」

「ばああか。」

明巳は必死に自分のしでかしたことを告白している真鱈目の小さい背中に嘲笑を送りつけた。

「それは勇気じゃないってゆーのよ。それこそ伸の勇気を横取りするだけの最低の根性じゃない。」

「う、うるせえええ！」

未だに床に転がりつぱなしの明巳に駆け寄り、勢いもそのまま真鱈目は明巳を蹴り上げた。

抵抗できないまま体を少し浮かせて、ゴトリと明巳は無茶な体制で転がった。

「し……ん……」

苦痛の鳴咽でもなく、暴力への恐怖の悲鳴でもなく、体が浮き上がるほど強烈な一撃を食らって尚明巳が口にしたのは、ただ、伸の名だけだった。

プツリ。

地面から人の胸の高さに持ち上げたりんごは、手を離し地面に落ちると碎け散る。

しかし、一度、更に高い学校の屋上に持って行ってから落とせば、

地面についた段階でもはやそれは粉微塵、ジュースになる。

この状況で浮き足立っていた自分への絶望はインビジ・ブルーの枠を超え、他人に認識されない域を超え、ネオ・インビジ・ブルーに突き抜けた。

「あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ
あ！！！！」

伸の叫び声が狭い蔵の中に響き渡る。

一瞬だけ伸から風が全方位に吹き、そしてその風の数十倍の吸引力でセカイが、透明になった伸に引きずり込まれていく。

「な、なんだよこれえ！」

父である誠のネオ・インビジ・ブルーの暴走とは異なり、伸のネオ・インビジ・ブルーは伸の体型の形の『穴』がどんどん巨大になり、巨人のようになっていく『セカイの欠落』が歩いてくるように見える。

伸は欠落が明巳と義美に触れないように気をつけながら二人を縛っている紐に触れた。

とたん透明になった紐はアイデンティティーを崩壊させ、その戒めを解く。

真鱈目はよろよろと後ずさりをした。すると後ろにいる義美にぶつかり盛大なしりもち。

「じゃ、じゃまだあ！どけえ！！！」

すぐ横にいる義美を押し飛ばし、振り向いた真鱈目は蔵の扉を開け放つ。そして外から鍵をかけた。

「逃がすかよ。」

伸はそのまま真つ直ぐに蔵の入り口へと進んでいく。

手をかざす必要さえなく、歩むスピードも緩めずに蔵の扉へ。

透明境界が蔵の壁に触れた瞬間、病院でCTスキャンされている人間の胴体のようにあっけなくその壁は消えてゆき、そして中心の伸が壁にぶつかる頃には、そこにもともとそんなものがなかったかのように蔵の外から真つ赤に染まっている夕日が差し込んできた。

「コレはいったい何が起きているんですか。」

「大丈夫だよ、義美。」

ずるり、と後ろで音がして我に返る。

「明巳！明巳い！こんな無茶して…ごめ…」

ごめん。それを言い切る前に明巳は手を伸ばして義美の口を塞いだ。

「それはなし。これは私が好きでやったことなんだから。義美がそんなに泣きそうになること無いんだから。」

子供をあやすように、優しく微笑んだ明巳はうつむく義美の頭をなでてあげる。

「明巳……。うん。」

「それよりも、今は。」

「はい。あの伸さんの様子はどうということなんですか？」

通常のインビジ・ブルーは伸が世界に溶け込んだように見える。しかし、どうやら今の伸はその律を逆転させているように見える。だから、穴があいたようになったセカイが普通の人間にまで目視できるのだらう。

「あれはね、伸の家系らしくて、テンションが下がると本当に透明になっちゃうんだよ。伸のヤツは。」

「透明に？」

「そう。義美、初めて伸のことを振ったとき、いつの間にかあいっなくならなかった？それこそ消えちゃったみたいに。」

「え、ええ。」

「それ、すぐそばにいつがいたんだよ。でも、見えなくなってただけ。」

信じられないと口元に手を持っていくとして、義美はそれを胸に当てた。

まだ、温かさは残っている。いや、むしろどんどん温かくなっている。

「テンションが下がると消えるって言うのですか？」

「そう。信じられないかもしれないけどね。」

「信じます。あなたがそういうなら。伸さんがそうだというなら。」

「ふふふ。すごいな義美は……」

なんだか、酷くあいまいな笑みを浮かべる明巳。

「明巳？」

「いつもはテンションが上がれば戻るんだけど、あれはどうすればいいかなあ。なんか激情に駆られてるようだし、いつものインビジ・ブルーとは違うし。」

「……？明巳には『いつものインビジ・ブルー』も見えているんですか？」

「ん、何でだか知らないんだけどね。幼馴染だからかもしれないし、何かあるのかもしれないし。」

義美はそこまで聞いて、かすかに胸が痛むのがわかった。

私は、本当に伸さんのことを好きになったのですね。そして、だからこそ、私にもわかったのですが。

「明巳。」

「ん、そうだなあ。あいつのテンションをあげさせるにはあの透明空間に入らなきゃだよ。どう考えてもさあ。」

トーンが違う義美の声には気付かなかったのか、腕を組んでウンウンと愛生はうなり続けている。

「ん？ゴメン考え込んだ。何か言った義美？」

「……いえ、なんでもないですよ。」

「そう。義美、さっきあその壁が消えちゃったのを見ても、伸を元に戻すためにあの透明空間の中に飛び込む度胸はある？あのままじゃ伸、あのストーカーヤロウを消しちゃうかもしれないからさ。それはさすがにいろいろまずいっしょ？」

「え、ええ。それは確かに。」

では、と前置きしてもう一つ頷く義美。

「あの中に飛び込めば伸さんを元に戻せるんですね？」

「その確信はないんだけど、私と伸を信じられる？」
と。

その一言は酷く軽かった。

まるで、あ、会計足りないからちょっと百円貸して、というくらい
の軽さ。

しかしそれは、とんでもない信頼を伸においていなければ出てこな
い一言だ。

眉をひそめて、義美はきゅっと手を強く握る。

「ずるいですよ。まだ、私は伸さんのことをぜんぜん知らないんで
すから。」

「やっぱり、信じられないか。」

「違います。私は私のことを信じるのと同じく、明巳と伸さんのこ
とを信じますですよ。ただ、私が言ったのはそういう言い方はずる
いですよということですよ。私が入り込む余地がないって言いた
いんですか？」

「えうう……？なんでそうなるの？さあ、早く行かなきゃ行かなきゃ
！」

満足に体を起こせない明巳は真っ直ぐに義美へと手を伸ばした。

「ええ。いくですよ。」

義美はその腕をしっかりと掴み優しく肩にかけた。

お互い頷きあってから、挟れている地面の行き先を目印にして二人

は伸を追いかけ始めた。

第十九話『決着と彼女達』

「何だよ、何なんだよ。あれ人間じゃねーのかよ。」

真鱈目は恐怖で息を荒げながら、自分の家にもかかわらず動転のあまり行き間違い、そしてやっと家を迂回した。

と。

目の前の庭の中心には弧を描きつつ地を抉り、家さえも貫通し、そして自分の目に立ちほだかる巨大な欠落があった。

「ひ、ひい」

ずるずる、足を後ろに下げることままならず真鱈目はすり足で一步引く。

追い詰めるように、それにあわせ伸は一步踏み出す。

「おい、好き勝手やったんだ。もっと何かねえのかよ。あれだけご執心だった大澤さ……義美を突き飛ばしてここまで逃げてきたんだろ？」

「バ、化け物！」

地面は抉れ、際限なく大きくなっていく領域はどんどん高度を増し、上空に浮かぶ雲に、ぽっかりと巨大な伸のデスマスクを作り出す。

よろつきながら真鱈目は近くに転がっていた竹箒の柄を引っこ抜き、

袈裟に構えると伸に向けて破れかぶれの突進を試みた。

「なんだそれ。縛った女の子とか、動けない男とかを蹴り飛ばすのは得意なくせに、一対一になったとたんにそれかよ。」

伸は延々広がっていた透明領域をその体に濃縮。

振り下ろされた竹の棒はあっけなく霧散してしまった。

「行くぜ、齒あ食いしばれ！」

思いつきり拳を握り締めて、真鱈目の頬を殴り飛ばした。

「ふいひゃああああ!!」

殴られた真鱈目の頬は霧散し、齒で切れた口内の血がゆっくりと首のほうへと伝っていった。

「殺さないでくれええ」

「知るかよ。痛みはないだろ？もともとそこにないことになってんだからさ。俺はともかくな、あの二人に散々なことしておいて自分が可愛いですってそりゃねえだろ。」

普段の伸からは絶対に出ることはない残酷な面が表立っていた。

「ふん。」

ひゅうひゅうと口の大穴から息が漏れている。ダラダラと垂れる血は襟を赤く染めていた。

ついさつき真鱈目が明已たちを見ていたのと同じ目で鼻で笑い、伸は目を細めて真鱈目を見下している。

「消えろよ。」

伸はゆつくりと拳を上げた。

それは体に濃縮した力を更に腕一本に集めたもの。セカイの欠落ではすでになく。対となる別セカイである。

触れたものはプラスとマイナスで打ち消しあうが如く容易に消滅してしまうだろう。

本能的にその危険を察知したのか、真鱈目は過呼吸になったように何度か体を痙攣させて昏倒する。

「伸！ダメ！」

「伸さん！やめてくださいです！」

明巳と義美はきしむ体に鞭を打ってそろって伸に抱きついた。

「ちょっと離れててくれよ。二人とも。こいつはいちやいけいないだよ。」

「ダメです！人を殺しちゃダメなんですよ。気絶しているこの人を消すって言うならそれはさっき私たちがされたことといつしよじゃないですか。そんなことする人は嫌いです。私と共有したいことで、こんなことだったんですか？」

「伸！こいつはどうしようもないけど、でも、伸が消しちゃっていいみたいなそんなものじゃないでしょ。そんなの伸らしくないよ」

「いいよ。」

「ば、ばかあつ！」

ガゴンッ！

明巳渾身の大きなアッパーカットが伸のあごにめり込んだ。

「ペギイイイ！？」

火星人の断末魔な悲鳴を上げて、その場で大きくのけぞって舌を噛んだ伸は後ろに倒れこんだ。

「な、何をするですか明巳。いきなりアップパーカットだなんて。話が違っじゃないですか。」

「う、うゝ、思わず。イラッとしちゃって。」

倒れこんだ伸を優しく介抱しようとする義美。

それを見て、肩眉だけ持ち上げて、明巳はそれとなく義美を押しつけ体を二人の間に押し込んだ。

「な、なにをするですか。」

「ゴメン、伸。思わずやりすぎちゃったけど、まあ『いつものこと』だからコレくらい大丈夫、だよ、ね。」

「な、何を言い出すですか明巳！」

「なんのこと？いつもどおりのやり取りをやってるだけだけど。」
「な、ずるいですよ。」

わりと積極的に、ぐいぐいと伸と明巳の間に割り込み返そうとする義美。

「ん？」

きよんとするフリをして明巳は負けじと押しにこらえる。プルプルと体が震えているのはここだけの秘密。

「明巳いいそれはないですよ！」

「義美、何のコトだかさっぱりわからないけれどあ？」

「いてて。ちょっと二人とも俺の上からどいてくれ。まだケリがつ

いてないんだから。」

真の上で押し合いをしている二人を押し返して、伸は再びゆらりとこぶしを上げた。

「ああっ！伸！？」

「伸さんダメですよ！明巳もアッパーはダメですよ！」

「ちっ」

拳を握っていた明巳は残念そうにそれを解く。

「恥ずかしいですけど、さっきの話の通りに。」

「わ、わかってるわよ。」

「でも、もしあれだったら明巳はしなくていいですよ。私は大丈夫ですけど。」

「なにいつてるのよ。別にコレくらいどうってコト……」

「だからさ、悪いけどどいてくれって二人とも。」

力を増しているせいか、二人がかりでも伸をとめることができないと、なれば、事前に打ち合わせをしていた通り最終手段しかない。

「い、いつけー！」

「いただきますです。」

ゆらりと拳を上げた無防備な伸の左右から明巳と義美は抱きついた。そして、そのまま伸の両方の頬へそれぞれが口づけをする。

「……………え？」

「ばあああぁん！！！」

轟音を立てて正面の門が爆発したみたいに開いた。

「だいだいだいだいああいスクウウウプ！！！！アーツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

そこにはカメラを広げる両手に一個ずつ、胸に固定したものを一つ、顔の前に固定したものを一つの計四つのカメラを装備してすべてのカメラからすさまじい勢いでフラッシュを焚いている祇園愛生と、その横で控えめに撮影している桜庭圭吾。

「題は『真犯人を捕まえた青崎伸』かー!?」

「あれー。愛生先輩さっきといっていることがモゴモゴ……」

愛生は残酷に微笑んでその口にハンカチを捻じ込んだ。

螺旋を描いて一度弾けて拡散した透明領域は一気に伸の中へ収束されていく。

その過程で、今まで消し去ったものがすべて伸の周りにバラバラと出現しだし、真鱈目の頬もきらきらと輝く粒子で元に戻った。

「俺、今何を……」

「し、伸！あんた今までのところ覚えてないの？」

「覚えてないのですか？」

「うーん、真鱈目に蔵にぶち込まれたあたりからあいまい？」

「じゃあ。………はあああよかったああ。」

かっくりと明巳は頭を垂れた。

「あれも覚えてないですかああああ。」

逆に義美は残念そうに頭を垂れる。

「まあまあまあ。いいじゃないか。いいじゃないか。大団円だろう？これはもう。私も満足、それに義美君もだいたいいいじゃないか。」

やったらご機嫌の愛生は三人の間に割って入り倒れている真鱈目をやたらと撮影。鼻歌交じりに真鱈目の蔵の中隅々まで撮影を開始した。

「……あれ？なんだか、きゆうに。」
かくりと、糸が切れたように伸はそこに倒れこんだ。

不意にそれを支えたのは満身創痍の明巳でも、義美でも、圭吾でもなく。いつの間にか出現した伸の父こと青崎誠だった。

「いやあ。愚息が皆さんにご迷惑をおかけしました。」
伸を軽々と担ぎ上げ、誠は深々と頭を下げる。

「あ、おじさん、そんなこと。」
「あああああ！大変だ！明巳君体中打撲だらけじゃないか。ああ、女の子をこんな目に合わせるなんて僕は伸を育て間違ったのかっ！あああああ」

どたどたと屋敷の隅にかけていく誠。しかし、ここが大衆の面前であることを思い出し、かろうじて戻る。

「明巳君。これは我が家に伝わる秘伝の傷薬だ。コレを塗りさえすれば三日で大概の傷は治る。」

でも、と、物静かな線の細い風貌を、一際縮込ませて誠は頭を深々ともう一度、下げなおした。

「明巳君の体に傷をつけてしまったうちの息子にはキツツイ折檻を入れておくからとりあえず安心して休んでね。でも、その薬は心の傷には効かないんだ。さすがに青崎家ウン百年の秘薬と言えども。だから、もし、明巳君が責任を取らせたいのだとしたら、僕は喜んで伸に責任を取らせるしだいだよ。」

「大丈夫ですって叔父さん。こんなの大会じゃしょっちゅうですし、それにむしろ……いい思いをしたというかなんというかゴニョゴニョ……」

「ん？」

「あの。」

猛然と言葉でまくし立てる誠に話しかける機会をはかっていた義美はやつとの思いで口を開いた。

「はじめましてです。大澤義美と申します。」

「え？君は大澤寿樹君の一人娘、だよね。」

「はい？以前お会いしましたですか？」

「いや。彼とは個人的に付き合いがあるからね。昔一回あったことがあるんだけど、さすがに昔過ぎて覚えていないかなあ。お父さんによろしくお伝えくださいね。」

「あ、はい。それで、私、これから伸さんと……」

「ああ、伸の。馬鹿なヤツだけれど根はいい奴だから仲良くしてやつてくれるかな。」

「はい。」

義美は春の暖かい太陽が雲間から覗いたように、温かい笑顔を咲かせた。

「よろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げる義美を、うれしそうに微笑みながらこちらこそ

よろしく。などといっている誠になんともいえない苦笑を浮かべて、明巳も会釈を返した。

「どうやら伸は力を使いすぎたみたいだねえ。初めてにしては使いこなしていたみたいだけど。復活するまでは三日くらいかな。」

すべて見ていたかのような口調でそういうと、誠はまた一つ、納得したように深く深く頷いた。

そして、優しい目で、明巳を見つめる。

インビジ・ブルーに天然で体勢を持つ、強くて優しい女の子を。

そして、心配そうに肩に担がれている伸を見つめている義美に視線を向ける。

インビジ・ブルーを始めて体感して尚、息子を助けるために奮闘してくれた女の子を。

——伸は幸せ者だなあ。

「じゃあ、コレくらいで。本当に、ご迷惑をおかけしたね。」

「そんなことないですよ。」

「大丈夫です。」

「ありがとう。みんな。」

最後まで深々と頭を下げてから、一体どこにその力があるの?と聞きたくなるくらい軽々伸を肩にかついで走っていった。

「相変わらず……すごいなおじさん。」

「明巳。」

明巳は急に改まった口調の義美にきよんとする。

「なに?」

真っ直ぐに、義美は明巳を見つめていた。その真っ直ぐな瞳の意図

を測りかね、明巳は軽く首をかしげる。

「ずっと、明巳は私の親友です。でも。」

「ん？」

真剣な表情は急に、意地の悪い笑みへと変わった。

「でも、明巳は今日から私のライバルですよ。」

「えうう？ な、何を言って……」

「ごまかしても無駄ですよ。」

「ん。あ、あははは。」

にこりと微笑んでから、義美は先にいくですよ。といって、去っていった。

「そんなこと……って。まあ、いいか。」

義美の背中を見て、小さく息を吐いてから。

明巳は自分の唇に軽く触れてみた。

そして、軽い足取りで家への帰途に着いたのだった。

エピソード〜或いはそれこそが幸せな日々〜

/

エピソード

/

「おつはよー伸！圭吾！義美〜」

「おはよう明巳ちゃん。」

「おはようですよ明巳。」

「おー、おはよう明巳。珍しく殴りかかってこないんだな。」
「ギャー！！」

朝一の通学路。三日間ぶつ倒れていた伸は再び元通り学校への通学路を歩いていた。

今日からの通学で変わったことといえば、義美を圭吾が俺んちまで案内してきたことくらい。

でも、義美がこのメンバーに加わっても思ったよりずっと安定した日常のままだった。

「それにしても、もう伸ちゃんは大丈夫なお？」

俺の顔を覗き込むみたいに、圭吾はステップを刻んだ。

「完璧。でももうあーゆーのはゴメンだな。追い掛け回されるのはあれっきりの人生にしたいよ。」

三日前の騒動を思い出して目を細め、伸は空を仰いだ。

「それは私もそうだって。」

「私だってですよ。」

三人はそろって、肩をすくめて笑いあう。

「でも、もう平穏な日々が訪れてくれるんじゃないか？あわただし

「日々はあの日に一生分消費したと思う。」

「だろうね」

「正直、そうじゃなきゃ困るですよ。」

「……………」

ニコニコと微笑んだまま、圭吾はだまりどおしだ。

「?どうした圭吾。」

「なんでもないよお。ごめん、ちょっと先に行くねえ。後は三人で
ごゆっくりい〜」

ぶんぶん演技がかった様子で大きく腕を振りながら、圭吾はあつ
という間に見えないところまで飛んでいつてしまった。

「なんだあれ。」

「さあ。」

「学校までもう、すぐ着くですよに。」

「「「いたぞお!!青崎伸だあ!!」」「」」

「「つかまえるお!」」

急に背後から体育会系の声が響き渡った。

「へ?」

ゆつくりと振り返ると、なぜか男連中が群雄割拠。手には物騒な武
器を装備しまくってこつちを睨みつけている。

「今、俺の名前呼んだ?」

「「いけえええ!!」」

「え?え?あ?どういう……わあああああ!!」

「ああっ伸!」

「伸さん?」

走っていく伸と、それを追いかける男たちを見送る二人。

そこに、ふわりと風に乗り飛んできたのは学校新聞最新部。

表題のほぼすべてのベタを占めているのは、伸の頬に明巳と義美が

キスをしている写真と。

『ダブルアイドル籠絡！！今世紀最高のスケコマシの名は青崎伸！！！！』

「「え？」」

明巳と義美の声が重なる。

そして、どちらからともなくクスクスと笑い出した。

一面の左下のほうには小さく伸が捕まえた本物のストーカーである真鱈目の話題と、伸がストーカーとして名乗り出たいきさつが乗っていたものの、あまりにも衝撃的なニュースの陰に隠れて、あまり名誉挽回の役には立たなかったとか、何とか。

「けえええいごおお！！どおいったああ！！」

泣きながら伸は校内を駆けずり回る。

後ろに殺気立った鬼たちを引き連れて。

「や、ゴメンねえ、伸ちゃん。」

「赦すかああ！！」

「あつははははは……」

小日向高校が静かになるのは一体何時になることか。

ブルーに成ると存在感が薄くなるはずの青崎伸は、一躍学校のピンゴブックにでかかど名前を連ねる有名人へと格下げとなったのだった。

「これで、学校に知れ渡ったことになりましたですよ。」
「ああああああ〜」

明巳は頭を抱えてもんどりうつた。それを、愉快そうに見つめてから、義美はさっきの圭吾のように明巳の前へ躍り出る。

「公認の、ライバルですよ。明巳。」

「えう……そ、そんなことより伸を助けに行かなきゃ！あいつこのままじゃ殺されるわよ？」

「今回は、はぐらかされておきますですよ。」

明巳はなんともいえない苦笑を浮かべて。義美は、そんな明巳の様子さえうれしそうに。

二人は伸の絶叫が聞こえてくるところへ向けて駆け出した。

「ち、ちくしょおおっ！！なんで、何でインビジ・ブルーこんなときに限って発動してくれないんだよおお！！！」

「何をわけのわからないことを！！！」

「スケコマシには天誅を！！！！」

「！！うらやま……天誅をおおお！！！！！！」

「か、勘弁してくれええ」

入梅前の青い青い空に、伸の絶叫は響き渡り溶けた。

これは、暗殺者の家系に生まれた主人公青崎伸のどたばたとんでも青春ライフである。

——— 終幕。

エピソード、或いはそれこそが幸せな日々？（後書き）

稚拙な物語ではありますが、お付きあいいただき、本当にありがとうございました。

また機会があれば、よろしくお願いいたします。

指摘など、歓迎ですので、もしなにかあればお気軽にお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925b/>

アオイハル～普通じゃない俺のとんでもない青春の物語

2010年10月10日00時43分発行